
靈感ホスト

かなえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊感ホスト

【Nコード】

N2210J

【作者名】

かなえ

【あらすじ】

美雪が出会った美形の男はホストで霊能力者だという怪しいヤツ
妙な事件に巻き込まれて・・・。
ちよっぴりホーラー系？

恋愛もの予定です。

シリーズ化予定ですが、この話は完結しています。

「・・・・あーあー、なんか嫌になっちゃったなあ・・・・」

1

ボソリと呟いて美雪はココアを口に含んだ。

控えめなクラシック音楽が流れる店内には客の姿はまばらだ。

一人用のカウンターに腰を掛け、ガラス越しに町を歩き交う人々を眺める。

道路の向こうに黄色に染まったイチョウの木からはらはらと葉が落ちていのを眺めていると寂しい気持ちになった。

2

社会人の帰宅時間には早すぎるせいか、学生姿の女の子たちが甲高い声で話す声が耳に響いた。

マドラーでココアをかき混ぜながら、自分も学生の頃はあんなに笑っていたのだろうかと考えてため息をつく。

学生の頃は何かもが楽しくて仕方なかった。

箸が転がっても面白い年頃とはよく言ったものだ。

「あゝツイてない・・・・。世界が滅亡しないかなあ・・・・」

ボソリと呟いて、またため息をついた。

「テロリストみたいな事を言う子だねえ・・・」

隣からの低い声に、視線を向けると顔の半分はある大きなサンングラスをした男が美雪を見ていた。髪は真っ黒だが少し眺めの前髪は真ん中から一房垂れ下がっている。

黒い細身のスーツに赤いワイシャツは大きく開かれて銀のネックレスが見えている。

一目でホストと解る格好と雰囲気、美雪はため息をついて男から視線を外した。

「無視はいけませんって、子供の頃教わらなかった？」
男の声に美雪は眉を寄せる。

「教わったけど、ホストとナンパは無視するに限るの。あ、あと押し売りとかヤッチ」

「ホストってわかるんだ」

いかにも驚いたように言う男に美雪は上から下まで眺める。

「そりゃ、そんな格好ホスト以外しないでしょ」

「そうかなあ・・・ま、オレはホストとはびみょーに違うけどな。ホスト経営しているオーナー」

「どーでもいいけど、わたしお金ないから客にはならないわよ」

「別に客にしようとは思ってないし。あんた、遊びで金使うタイプじゃないしな」

「そうそう」

よくわかっていないと頷いて美雪はココアを飲む。

「何があったか知らないけど、物騒なことは言うのやめようよ」

「あんたに関係ないでしょ」

「関係ないけど、たとえば明日の朝、あんたがなんかの犯人でテレビに出てたら俺 後悔するからなあ

しかも『むしゃくしゃしてやった』とか言っていたりして、あの時おれが少しでも話し聞いてやったらなあと思っ
思うのはいやじゃん？」

「なにそれ。犯罪なんてしません！」

「でも、あんたソレぐらい悩んでいるって顔しているぜ」

顔を覗き込むようにみってくる男に美雪はのけぞった。

「顔が近い！」

「あ、悪い。オレのクセなんだよね」

「はあ？」

下から見上げるように顔を覗き込むのがクセの人間なんてであったことが無い。

「まあ、悩んでも仕方ないって時があるからさ。ほら、ヒバリちゃんの歌にもあるじゃん、川の流れに身をまかせ〜ってな」

「そりゃ、身を任せてりゃ楽だろうけど何もしないで仕事が決まれば苦労しないわ」

美雪の言葉に男は肩をすくめた。

「あ、そういう悩み？」

「いや、まあ、人生の悩みもあるけど……。派遣の仕事を切られて、今月の家賃も危ういって言うのに
川の流れに身を任せてなんてられないって」

「ふーん。なるほど」

男はニツコリと笑ってスーツのポケットから名刺を取り出すと机の上に置いた。

厚めの名刺はキラキラと輝く紙がところどころ入っている 豪華仕様のようだ。

「なに？これは」

「オレの名刺。言っておくけど本名だからな」

机に置かれた名刺には 有限会社 セイント 勝運 鷹矢 と書かれていた。

「難しい漢字ね」

「ショウウン タカヤ。オレの携帯番号もメルアドもあるから人生相談ぐらい乗るよ」

「だから、お金ないんだって。そういう付き合い嫌いだし」

「オレ、靈感あるんだよね・・・」

「はぁ？」

水商売のキャッチだけでなく、靈感商売まで始める気なのかと美雪は顔をしかめた。

靈感があるという人間にロクなヤツがない。

「あんた胡散臭すぎるんだけど」

「だろうね。オレもそう思う」

鷹矢はうつすら笑って頷いた。

「誰にでも言っているわけじゃあ無いんだ。靈感とかそういうのって聞いたら気味悪いだろ」

「それも、客引き？それとも、新興宗教の勧誘？」

「ちがうって、まあオレの靈感が言うには、アンタとはまた会うつて感じる」

「なにそれ」

あまりの下らなさに美雪が笑うと鷹矢はため息をついた。

「信じられないのはわかるけど、近いうちに会うよ。俺達」

「あ・そ」

冷めたココアを一気に飲み干して机に置かれていた名刺を掴んでヒラヒラとさせて美雪は立ち上がった。

「一応名刺は頂いておきます。社会人としての常識だからね。あ、でも、今名刺を切らしておりますので交換はできないけど」

「切らしているんじゃないくて、ないんだろ。無職だから」

ボソリと呟いた鷹矢に美雪はムツとしつつも口に笑みを浮かべて手を振った。

「じゃ、さようなら。永遠に」

カツカツとブーツを鳴らしながら歩いていく美雪の後ろ姿を眺めながら鷹矢は呟く。

「永遠に……ってなりやーいいけどなあ。オレの靈感では嫌な感じで会いそうだよなあ」

「あゝ今日も面接ダメっぽかった・・・」

黒いスーツの上着のポケットに手を突っ込んで美雪は空を見上げる。夏に比べて高くなった白い雲が青空にポコポコ細く並んで続いている。

終わりが見えない白い雲に向かってため息をついた。

派遣の仕事が切られたのは先月。事務をしていたが突然の派遣切りにあったのだ。

100年に一度の不景気だとニュースで言ってたのが他人事に思えていた頃が懐かしい。

事務の仕事で正社員などこの時代求人すら見つけるのも大変だ。

ましてや一人暮らしの美雪には最低ラインの給料というものが出てきてしまう。

面接用の黒い鞆からペットボトルを取り出して一口飲んだ。

家から入れてきた麦茶だ。

節約できることは何処までも節約せねば。

ラッシュ時ではないせいか東京駅のホームは人がまばらだ。

次の電車の時刻を知らせる掲示板を見るとあと10分ほどある。

慣れないヒールを履いているせいで足が痛い。

ベンチを見つけて腰をかけ鞆からたった今受けてきた会社のパンフレットを取り出した。

名の通った一流企業・・・とまでは行かないが、それなりにやりがいがある、美雪のやりたい仕事だった。

面接で言われた言葉は「実務経験がないんじゃないか」という冷たい言葉。

「大体100年に一度の不況ってなんなのよ？やりたい仕事も出来ないなんて本当にありえない！」

ペットボトルのキャップを閉めながらボソリと呟くと聞き覚えのある低い声が答えた。

「まあだ、仕事決まらないの？」

「・・・なんでアンタがまた隣にいるのよ・・・」

うんざりして横を見ると、細身の黒いスーツに身を包んだ、鷹矢の姿。

今日はサングラスをしていない。

始めてみる男の顔に美雪は一瞬あっけに取られた。

整った顔立ちだとは思っていたが、驚いたのは瞳の色だ。

ダークブルー。

髪の毛は黒いが、顔は良くみれば何処と無く外人に見えなくも無い。

「ああ、そっか・・・コンタクト？」

最近カラーコンタクトなどという商品が出回っている。

美雪はまじまじと鷹矢の顔をながめて呟くと形のいい眉を寄せた。

「よく言われただけだし、オレ目はいいの。生まれつきの目の色で
ございますよ」

「・・・ハーフ？」

「父親も母親もどっちも日本人ならこんな瞳はうまれねえだろうよ。
父がイギリス人」

「へえ・・・」

「もう一ついっておくけど、英語はそれなりに話せる」

今までウンザリするほど質問されてきたのだろう、鷹矢はそう言う
とサングラスをかけた。

「オレはこの目が嫌いなんだよ」

「へえ・・・きれいなのにねえ」

人間とは贅沢な生き物だと美雪は思い、ペットボトルと会社のパン
フレットを鞆にしまった。

「面接だったんだ」

「何社目か解らないほどの面接ですよ」

「大変だね。ま、がんばって」

駅のホームに電車が通過するアナウンスが流れる。

「電車通過・・・だって」

ボソリと呟いた鷹矢に美雪は頷いた。

「だから何？」

「いや・・・教えてあげたの」

「子供じゃないんだから教えてくれなくてもいいんだけど」

ウンザリして言う美雪の肩を鷹矢は掴んでニヤリと笑う。

「もう一ついいかな。後ろ向くなよ」

「え？」

電車近づいてくる音と共に、ドンという大きな衝撃音が聞こえた。そして、急ブレーキの音と悲鳴がホームに響いた。

「な・・・なに？」

鷹矢に肩をつかまれたまま美雪は目を見開く。
鷹矢に後ろを振り向くなと言われたせいで振り向くことが躊躇われた。

「・・・飛込みだ」

「・・・ど、どうなってんの？」

「見ないほうがいいだろうなあ・・・」

ホームには悲鳴と怒鳴り声のような叫びが飛び交っていた。

「学生が飛び込んだぞ！」

「警察だ！救急車も呼べ！」

異様な空気に美雪は恐る恐る振るかえる。

鷹矢は止めなかった。

中途半端に止まった電車と、運転席の窓にベッタリと付いた血が目に入った。

ホームの下を覗き込んでいた客達が声を上げる。

「こりゃ、助からないなあ・・・」

「グチャグチャだな」

飛び込みなどみたのは初めての美雪は異様な空気に眉を寄せる。

不安と恐怖の為か呼吸が小刻みに速くなっている美雪に鷹矢は声をかけた。

「落ち着いて。息を大きく吸って吐け」

「・・・気持ち悪い」

「まじかよ・・・」

困ったように頭をポリポリとかいて、違和感を感じて鷹矢は視線を横に向けた。

「・・・またかよ・・・」

ウンザリしたように呟く鷹矢の視線を追って美雪は悲鳴をあげた。
血まみれの学生服を着た男がうつろな目で立っていたからだ。

「ひい。し、死んでないじゃない。この子でしょ？飛び込んだの」

「ばあか。良くみろよ。こんな怪我してたら歩けねえだろうが」

「そりゃそうだけど、さっき飛び込んだ子じゃないの？」

悲鳴に近い声をあげる美雪に鷹矢は静かに言った。

「・・・霊だなあ」

「はあああ？」

大真面目に言う鷹矢の黒いスーツの襟元を掴んでゆすった。

「バカじゃないの？ あんた」

「いや、透けてんだろ？ よおっく見ると」

指を差した先には血まみれの学生服の男の子。

恐る恐る見た美雪の目には、男の子の体がウッスラ透けて、景色が見えていた。

「ほ、本当に幽霊？」

「そう、・・・っておい」

そのまま意識を失いそうな美雪の腕を掴んで引き寄せた。

「おい、気絶したか？」

「・・・気失いたいけど、ぐらぐらする。気持ち悪い・・・」

「ちっ、貧血かよ」

舌打ちをして、黒いスーツのポケットから携帯電話を取り出して片手で操作する。

「ああ、オレ」

何度目かのコールで相手が出たのを確認して鷹矢は一方的に用件を伝えた。

「ちょっと面倒ごとに巻き込まれてさ、悪いんだけど車回してこい、東京駅まで。すぐこい」

相手の言葉も聞かずに、電話を切った。

「だから、サイトを見ないほうがいいって言ったじゃない・・・」

冷たい女の声に鷹矢が視線を向けると、制服を着た女が立っていた。女が着ている制服は、有名な進学校の制服だ。

電車に飛び込んだ男子学生が着ていた制服と同じ学校だということは鷹矢にもわかった。

無表情に血で染まった電車を眺めている。

「あのサイトを見たら・・・死ぬって言ったわよ・・・」

背を向けて階段を下りていく女の姿に鷹矢は眉を潜めた。

「なんだ？あの子・・・」

この人が、前に言ってた人ですか？」

3

茶色に染めた髪の毛を手で巻きつけながらアランは言った。

クセ毛のせいでクルクルと可愛く外側にカールしている髪の毛を人差し指で巻いてクセを付けている。

浅黒い肌のせいか、アジア系の顔立ちに見える。

Tシャツとジーンズ姿のアランはソファアに寝ている美雪を覗き込んだ。

「ああ。まったく、こいつ面倒ごとを背負うタイプの女だな」

ソファアに寝かされている美雪の前に座って鷹矢はため息をつく。

「迷惑をかけてごめん」

具合が良くなったのか頭を冷やしていた濡れタオルを額から外して美雪は起き上がった。

「もう大丈夫なんですか？」

アランがニコニコ笑って声をかけると、美雪は軽く頷いた。

「多分……。でも……。気持ち悪い」

「あ、僕、飲み物持ってきますね」

天使のような笑みを残して消えていくアランを見送って、美雪は鷹矢に頭を下げた。

「ありがとう。迷惑掛けてゴメンなさい」

「本当に、迷惑だよ」

「で、ここは何処？」

「オレの店」

「だと、思った」

店内を見渡す美雪の顔を見て鷹矢は苦笑した。

店の中だからか、サングラスを外している。

薄暗い室内でもやっぱり青い瞳は良く見えた。

「いい店だろ？」

「ホストクラブとか来たこと無かったけど、……。なんていうか
派手よね」

高級感だたよう店内を不思議そうに眺める美雪。

シャンデリアがつるされ、黒い革のソファが並んでいる。

「意外と小さいのね」

「どこもこんなもんだよ。ここ、歌舞伎町よ？」

掛けられていた薄い毛布を膝に置いて美雪は靴をはいた。

「あんた何者なの？」

ますます怪しい目で見られて鷹矢は苦笑しながら頭をかいた。
綺麗にセットされていた黒い髪の毛がくずれている。

「知る人はすくねえんだけど、霊能力者ってやつ」

「・・・・・・・・・・はあああ？」

口をあんぐりとあけて鷹矢を見る美雪に、水を持ってきたアランは
噴出した。

「だれでも驚きますよね。どうぞ」

「あ、ありがとう」

水を受け取って、アランを見上げると彼は天使のような笑みで

「本当なんですよ」

「・・・・・・・・わかった。もういい、今日はいろいろありすぎてつかれ
ているからあたし」

水を飲んで言う美雪に鷹矢はため息をついて、長い足を組んでふん
ぞり返って天井を見上げる。

「そうも言ってらんねえよ。見てみるよ」

鷹矢が指差した方を見ると駅で見た、血まみれの男の子がたっていた。
た。

「ひひひいいいい」

声にならない悲鳴を上げた美雪の姿が情けなくてアランは声を殺し

て笑っている。

「ちょ、なんで笑えるの？」

「僕、見えないんですよ。この店の ただの従業員なんで鷹矢オーナーの裏の仕手の手伝いは残念ながらできないんです」

裏の仕事というのはなんなんだろうかと疑問があったが美雪はもう一度部屋の隅に”居る”男を見る。

ウッスラと透けていて、色も薄い。よく見ないと見えないが、人間ではないことは美雪にもわかった。

「ねえ、なんで血まみれなの？」

震えている美雪の声が面白いのか、アランはまた笑っている。

「しらねえよ」

ムスツとして言う鷹矢はポケットからタバコを取り出して火をつける。

煙を口から吐き出して、部屋の隅に立っている霊を見た。

「オレ、見えるけど話きけないしなあ・・・相手が一方的にすげーウラミとかあれば別なんだけどなあ・・・」

「・・・それで霊能力者？」

冷たい目で見られて鷹矢は気まずそうに頭をかいた。

「しょうがねえーだろうが。世襲制でオレが跡継がないといけないんだから」

「はあ？」

ますます意味がわからない。

文句を言ってやろうと口を開いた美雪に、アランが可愛く小首をか

しげる。

「鷹矢オーナーのご実家がそういう家なんですよ。僕もよくわからないんですけど、霊とかタタリとかそういうのを収める神主みたいなやつでしたっけ？」

「・・・・メンドクサイから、その説明でいいわ・・・・」

ため息がちに言う鷹矢に美雪は震えながら部屋の隅でぼーっと立っている霊を顎でさした。

「じゃ、早くなんとかしなさいよ」

「っても、根源があるっぽいんだよなあ。うらみとかあって、出てきている感じじゃなさそうだし。声がきこえればなあ」

「使えないわよ。この人」

アランに文句を言う美雪に鷹矢は顔をしかめた。

「しょうがねえーだろうが、だからオレは跡継がないって言ったんだ！」

「知らないわよ！あんたの家の事情なんて。ってか、どーーするのよ？この子。家まで付いてこないわよね？」

「オマエになついているから付いてくるんじゃないのか？」

「ひいひい」

鷹矢の死亡先刻のような言葉に、美雪は悲鳴を上げた。

その様子を面白そうに見ていたアランはポンと手を叩く。

「おねえさんなら、話せるんじゃないんですか？」

「おねえさんって・・・・。そんな年齢じゃないんだけど」

「だって、名前知らないし」

アランの言葉に鷹矢も思い出したかのように頷いた。

「そういや、名前しらねえな」

「・・・美雪よ・・・山際 美雪」

「窓際？」

「山際！ヤマギワ！」

ツバを飛ばしながら名前を言う美雪を指差しながら鷹矢はカラカラと笑った。

「こいつ、窓際だから、首になったんだぜ、仕事。今無職らしいよ。アランも気をつけろよ。手に職つけないとこうなるぜ」

「だから、山だってんだろうが！」

バンと机を叩いて講義する美雪と意地悪そうに笑う鷹矢にアランもニコニコとほほえんだ。

「美雪さん面白い方ですねえ・・・。僕はアランといいます」

「アラン・・・」

本名だか、水商売用の名前だかわからないと思ったが、あえて突っ込んで聞くのも疲れ美雪は頷いた。

「美雪さんなら霊の声きこえるんじゃないですかねえ」

アランの言葉に美雪は慌てて首を振った。

「無理よ。わたし、霊なんて今まで見たこと無いし」

「だからですよ。波長があうんじゃないんですか？」

アランの言葉に、鷹矢は納得したように頷いて美雪を面白そうに見た。

「なるほど……。ちよつと話かけてみる」

「あんたねえ・・・そう簡単に出来るわけ無いでしょ・・・」

「駅からここまで付いて来たんだ、家まで付いてくるかもしれないねえぜ」

「・・・・・・」

家まで付いてこれちゃ困る。

美雪は顔をしかめて、ため息をついた。

「も、もし、とりつかれたり、襲われたら助けなさいよ！」

「金しだいだなあ・・・」

指で丸をつくった鷹矢に美雪は唇をかみ締めた。

「あんたねえ、私から金とるつもり？」

「オレ、それで食ってんだけど。まあ、霊の声がきこえねえからあんまり、依頼うけないんだけどね。だからホストクラブ経営してんだけど」

「・・・・いくらよ？」

「はあ？」

「いくら払えばいいの？」

キッと睨みつける美雪に鷹矢は笑って手を振った。

「悪かった。冗談だ。今回は金はとらねえよ」

今回は、という言葉が気になったが美雪はうなずいて立ち上がった。

「絶対に助けなさいよ」

「はいはい」

何度も確認する美雪に軽く手を振って鷹矢は2本目のタバコに火をつけた。

「あ・・・あのさあ・・・君、どうして付いてくるの？」

そろそろと、男の霊に近づいてなるべく視線をそらして美雪は話しかけた。

直接見るのは怖い。

血まみれの顔を見る勇氣は無く、視線をそらしながらも一度はなしかける。

「あんた、なんか言いたいことあるんでしょ？聞いてあげるから言ってみなさいよ」

『僕は・・・殺されたん・・・』

「へっ？」

頭に直接響いてくるような、彼の声が聞こえた気がして美雪は目を丸くする。

「こ、コロサレタ？」

『ころ・・・された・・・。・・・呪いの・・・サイト・・・見た・・・』

「呪いのサイト？」

「美雪さん、霊と話せましたねー凄いです！」

4

ニコニコして言うアランに鷹矢はムスツとして出されたコーヒーを乱暴に飲んだ。

霊の声など聞こえたことなどない鷹矢にとって美雪が話せたことが気に入らないらしい。

つくづく、気持ちが態度に表れる人間だとアランは苦笑する。

話したといっても、一方的に霊が『コロサレタ』ということと『サイト』というキーワード的なものしか聞こえなかったのだが。
男の子の霊は消えてしまったのだ。

「ほほほ、ゴメンなさいねえ。私、霊の声がきこえちゃって」

バカにしたように言う美雪に鷹矢も負けじとニヤリと笑った。

「へん、オマエ、霊を封印とかできねえだろ。修行してねえもんなあ。オマエのがすげーなんておもってねえからな！」

「負け惜しみはそれぐらいにしたらあ？ほら、才能ってやつかしら

「？」

言い合いになりそうな二人の間に立って、アランはまーまーと仲裁にはいる。

「そんな事している場合ではないんじゃないんですか？」

自分よりはるかに年上だろう、鷹矢と美雪の子供じみた態度に内心ため息をつきつつ美雪にもコーヒーを置く。

「そうだったわね」

美雪はうなずいて、コーヒーに砂糖を4杯とミルクをたっぷり入れてスプーンでグルグルとかき回した。
ソレを見た鷹矢が顔をしかめる。

「うげえ、オマエ砂糖いれすぎ」

「甘いほうが美味しいじゃない」

そういえば、美雪と始めて会った喫茶店でも甘そうなココアを飲んでいたのを思い出して鷹矢は顔をしかめる。

「僕には見えないんですけど、その霊の男の子は、殺されたって言っているんですか？」

「うん」

「・・・殺人事件じゃないですか」

顔色を変えて言うアランに鷹矢は首をかしげた。

「いやあ、オレ飛び込むの見てたけどアイツ誰かに押されたとかと

かじゃないな、自分で飛び込んだぜ？」

「……？　どういうこと？」

首を傾げる美雪にアランも首をかしげる。

「では、自殺ってことですか？」

「いや……前に依頼された仕事で似たようなのがあった。いつけん自殺したようにみえるんだけど、霊に殺されるってやつ」

鷹矢の言葉にアランが問いかけた。

「つまり、呪いってやつですか？」

「そんな感じだな。よく、三代先まで崇めてやるとかいうじゃん、あんな感じで子孫を呪い殺すってイメージだとかんがえやすいかな」
「そんな怖い話やめてよねえ」

嫌そうな顔をしている美雪に、鷹矢はにやりと笑う。

「んー。その時死んだ霊と同じ学校の子だと思っただけど女の子がさ冷めた目で「サイトを見たから……死んだ」とか言ってたんだよね。」

アイツなんか知ってんじゃないの？」

「その男の子の霊も　サイトがどうか言ってたんですよね？」

アランの問いかけに美雪はブンブンと頭をふった。

「言ってたけど、知らない！　知らない！……まあ、霊も消えたんだしさ。これでいいんじゃない？」

鞆を持って立ち上がった美雪は
帰るつもりなのか、満面の笑みを浮かべている。

「消えたけど、成仏はしてねえよ」

「でも、もう見えないし。多分、殺されたとか言いたい事いえたらすっきりして成仏したんじゃないかしら？」

「・・・俺んちの家訓でなあ一度かかわった霊はほおって置くなっていうのがあるんだよ」

「ふーん」

興味なさそうに相槌を打って美雪はもう一度微笑んだ

「あたしは知りません。あんたの家族でもないし」

「確かにその通りですね」

頷くアランに美雪もそうでしょう！とばかりに頷く。

「・・・ま、いや。絶対にオマエはオレに協力するから」

「”僕には霊の声がかきこえないんで、手伝ってください美雪さん”
ってお願いしたら協力してあげるけど？」

挑戦的に言う美雪に鷹矢はそっぽを向いた。

「無理ですよ。鷹矢さんは、頭を下げない人ですから」

苦笑じみたアランの言葉に美雪は優雅に微笑む。

「あらあ。まあ、いいけどお。霊の声が聞きたくなったらあたしに連絡しなさいよ」

「オマエの連絡先なんてしらねえよ」

「あら、じゃ教えというてあげるわね」

高飛車に言いながら携帯電話を取り出した美雪に舌打ちしながらも鷹矢もポケットから携帯電話を取り出した。赤外線通信をしてお互いの情報を交換する。

「おい、間違ってるぞ。名前、窓際　美雪って入れなおしておくわ」
「あんたねえ……」

ピピッと携帯電話を操作している鷹矢に呆れている美雪。

「スイマセン。子供っぽいところがあるんですよ」

「この人ちゃんと、この会社経営していけているの？」

「ええ……。まあ演じるの得意みたいですよ」

「演じる？」

首を傾げる美雪にアランはニッコリ笑う。

まるで天使のような無垢な微笑だ。

美雪は25歳を少しいったところだが、アランは間違いなく20歳前後だろう。

水商売をしているこの店で未成年が働いていることはありえないと考えると、10代ということはない。

だが、15歳といっても通りそうな無垢な笑顔だ。

鷹矢との会話を見ても、鷹矢より随分大人だと感じてしまう。

「ホストって女人を楽しませるのが仕事ですからね。僕はそういうの苦手なんで裏方ですけど」

「俺だって嫌だよ。女はベタベタする。色仕掛けする。甘い声をだす。大嫌いだ」

携帯電話をしまいながら言う鷹矢に美雪はますます呆れた顔をする。

「あんたね・・・それが商売でしょうが」

「うまくやってるよ。俺」

「そんな態度で？」

こんな口の悪い男がホストをやっているとは思えない。中にはマニアクな人間もいるかもしれないが。美雪が想像している

ホストという人間とはかけ離れているように感じた。

顔やスタイル、総合的にはかなり上位にいるが、性格がいまいちよろしくないように思えた。

「だから、隠してんの。それにオレ、ホストじゃなくてオーナー。裏方だオレも」

「でも、鷹矢さん目当てで来るお客様も多いですよ」

「ったく、オレは客のあいてしないうてーの。そういうのは、オレの従業員がするからなあ」

天井を見上げてぼやいている鷹矢にアランは肩をすくめた。

「こういうオーナーなんで困っているんですよ」

「おはようございまーす」

入り口が開く音がして、頭をワックスで固めたスーツ姿の男が数人頭を下げて入ってきた

鷹矢がいった、従業員、ホストが出勤してきたのだ。

「おう、お疲れ」

「あれ、お客さんですか？」

美雪の姿をみて、ホストたちが慌ててポケットに入っていた手を出

して背を正す。

その姿を見て、ホストも意外と大変な商売だなと美雪は思った。

「客じゃねえよ。こんな女」

「こんな女とは失礼ね!」

「おら、そろそろ開店するんだ。元気になったんなら、とっとと帰りやがれ」

動物でも追い払うかのように、シッシツと手を動かす鷹矢に美雪は思いつきり舌を出した。

「お世話になりました!」

アランにニツコリ笑って御礼を言うと 出勤してきた数人のホストに頭を下げてつかつかと歩いていく。

店から出て行く美雪の背を見送って、ホストの一人が眉をあげた。

「すごい人ですねえ……。鷹矢オーナーにあんな口きくなんて……」

「勇気あるなあ。あの人……。もしかして、オーナーの彼女ですか?」

彼女という言葉に鷹矢は顔をしかめた。

「そんなわけねえーだろうが!」

「お似合いだと思いますけどね」

ボソリと呟いたアランを鷹矢は思いつきり睨みつけた。

「まったく、今日は散々な目に会ったわ」

美雪は一人暮らししているアパートのドアの前でゴソゴソと鞆に手を突っ込んで鍵を探しながら一人で呟く。

5

今まで霊を見たことも無いのに、妙なを見て話してしまうし、飛び込みの現場に居合わせる嵌めになるし。

これもすべて、アイツのせいだ。

あの、男と出会ってからおかしいことになっているんだ。

イライラしながら探し当てた鍵を使って部屋のドアを開ける。

一人暮らしの部屋は、5万という格安の家賃の割には広い部屋だ。6畳の部屋と、4畳のへや、そしてキッチンと風呂トイレは別についている。

友人にいわく月の部屋ではないかと言われたことを思い出して、顔をしかめた。

このアパートに住み始めて1年たつが、今まで何も無かったのだ。いわくつきなどあえないと、心の中で唱えて部屋へと入った。

「ほら、なんにもいないじゃない」

いつもと全く変わらない、部屋に安心して小さなソファ―に腰をかけた。

ホストクラブ聖の事務所で机の上に置いていた携帯電話が着信を知らせブルブルと震えている。

液晶の画面には”窓際 美雪”と表示されていた。

ソレを見たアランが軽く笑みを浮かべて携帯電話を鷹矢に渡す。

「名前、ちゃんとヤマギワにしてあげてくださいよ」

「・・・こんな時間になんだあの女」

携帯電話を受け取って、鷹矢は事務所の壁にかけてある時計を見た。時刻は深夜2時をさしている。

1時までで一旦営業は終了しており、店は静かだ。

日の出からの営業に備え、隣の休憩室からは待機しているホストたちの笑い声が聞こえてきた。

鷹矢はパソコンの電源を落として、携帯電話の通話ボタンを押すと美雪の大きな声が聞こえて受話器を耳から離す。

「ちょっと！ウチにあの血まみれの幽霊がいるの！」

「・・・で？」

冷めた鷹矢の態度に腹を立てたのか美雪は受話器の向こう側で怒鳴

り声を上げた。

「で？ じゃないわよ！ なんとかしなさいよおお！ あんた、霊能力者とか言っただけじゃなかった？ 金払うから今すぐウチに着なさいよ！」

態度のでかい女だ。

「オレ、ほら霊の声が聞こえないからソイツ払うのは無理。なんかいあるみたいだし？」

「アンタが無理なら違う人紹介しなさいよ」

「違う人っていつでもなあ・・・」

鷹矢は思案して、ため息をついた。

「ちよつとソレは簡便してくれないかなあ……。いろいろ理由があるんだよね、複雑な・・・」

「もー！ 頼りにならないわねえ！」

「オマエ・・・とことん失礼な女だな。オレにそんな口利いたのオマエが初めてだ」

「知らないわよ！ 元はといえばアンタにかかわったせいでおかしなことがおき始めてるんだからね！」

一理あるような気がして鷹矢は背広から車の鍵を取り出した。

「オレもそんな気がする。今回は特別待遇だ。迎えにいくからお前の家教えろ」

「目的地に着きました、案内を終了します」

「おいおい、いっつも中途半端な場所で終わるよな。目的地周辺に着きましたって、アイツのアパートはどこだよ」

カーナビの無常な案内に鷹矢は一人呟く。

深夜2時を過ぎているせいか、道には人どころか車すら見かけない。

電話でもかけるかと車を停めると

アパートの前の道路に座っている美雪の姿が見えた。

助手席の窓を開けると、運転席の鷹矢に気づいた美雪が駆け寄ってきた。

ピンク色のジャケットを羽織っている。

派手なジャケットだ。

「おそーい」

勝手に人を呼び出して置いて遅いと文句を言われるとは思っていなかった鷹矢は軽く言葉を失った。

ここまで自分勝手な女は珍しい。

鷹矢の周りにはいないタイプだ。

「で、何処に居るって？」

車のエンジンを切って言うと、美雪はアパートを指差す。

「私の部屋」

電話で怒鳴り散らしていた元気さは微塵も感じられない。

「……あれからなんか話したか？」

美雪は無言で首を左右に振った。

「とりあえず乗れ」

助手席に美雪が乗ったのを確認して鷹矢は静かに車を発信させる。

「何処に行くの？」

「オレの店以外にいくところあるか？」

「……」

「オレのマンションなんて絶対にお前なんかあげてやらねえーし」
「…………あたしだって行きたくないわよ」

一瞬お互いにらみ合って、鷹矢はアクセルを踏み込んだ。

助手席の美雪は眠たそうな顔で流れていく景色を眺めている。

「小さい頃、たまに見える霊が怖くてさ。オレ、よく母親に泣き付いたときがあったよ」

ハンドルを握りなら突然話し出した鷹矢に美雪は視線を向けた。
夜ということもあり、さすがにサングラスはしていない鷹矢の顔は相変わらず整っている。

半分外国の血が流れていというのも頷ける。

青い瞳に白すぎる肌。背は180センチはあろうかという長身に細身の体。

悪いところは性格ぐらいか。

美雪は一人呟いて、鷹矢から視線を外して流れる景色を眺めた。

「やっぱり血まみれなの？」

「まあ、それぞれだな。顔がグチャグチャのヤツもいたし……丁寧そうなヤツもいた。俺はヤツラの声が聞こえないからただ立っているんだよ。あいつらが。寝るのも怖かったからよく親の布団にもぐりこんだな」

「今は怖くないの？」

「まあな。馴れてヤツだな。無視すればいいんだよ」

ベットの横に立っていた血まみれの少年を思い出して美雪はブルリと体を振るわせる。

あんなのが傍に居て無視することなんて出来るはずも無い。

「突然見て、慣れろっていうのも無理だろうケドなあ……。ま、今回はあの男の子の霊と波長があって見えちゃったただけだと思うけどな」

鷹矢の言葉に安心したかのように美雪は軽く笑った。

「そうだよね」

「とりあえず、あの男の子の霊をどうにかしないとな」

「……サイトとか言ってたよね……」

「どうするかなあ……」

高速道路を降りてしばらく走り黒いベンツは駐車場へと停められた。新宿では今時珍しい砂利の駐車場だ。

フェンスには”クラブ”聖様”専用”と書かれたプラカードが立っている。

ホストクラブ聖という店の名前が書かれている駐車場のスペースは2台だけだった。

鷹矢が専用にかりているのだろう。

美雪が車から降りたのを確認して鷹矢は車をロックした。

「……あのさあ……サングラス……夜なのにするの？」

運転しているときには無かったはずのサングラス姿の鷹矢の姿をみて異人を見るような目で見てくる美雪に顔をしかめる。

「うるせえなあ。職場の周りではあんまり素顔見せたくないの。めんどくせえから」

「メンドクサイ？」

意味がわからず首をかしげている美雪に店に入れとジェスチャーで

伝える。

クラブ聖とかかれた看板の電気が消えている。

よくみかける、写真はこの店ではないようだ。

一見みただけではホストクラブだとはわからない。

「おつかれさまでーす」

店に入ると フロアーに居たホストたちが頭を下げた。

ムツとする香水の匂いにウツと声をだして顔をしかめた美雪の背中を無理やり押して店の奥へと連れて行く。

関係者以外立ち入り禁止とかかれているドアをあけて中に入るとアランがニコニコと笑って頭を下げた。

「こんばんわ。美雪さん」

「すいません、夜分遅くにご迷惑をおかけして」

頭をさげる美雪に、アランは慌てて手を振る。

「い、いえ。それなら鷹矢オーナーに言ってください」

「そうだぞ、オレの店なんだからな。礼を言うのも、頭を下げるのもオレにだろうが」

「いやよ。あんたのせいで、わけのわからないことになっていると思うの。あたし」

「・・・なんだよ、オレのせいだっていう証拠はあるのかよ」
サングラスを外した鷹矢の青い瞳を睨みつけて美雪は頷く。

「女のカンよ」

「・・・カンねえ・・・」

ため息をついて鷹矢はロッカーから毛布を取り出してソファに座る美雪に投げつけた。

「なに？」

毛布を投げつけられて首をかしげている美雪に今度は枕を投げる。

「少し寝ろ。そのソファでも十分ねれるだろ」

「・・・ありがとう・・・」

さすがに疲れているのか素直に礼を言った美雪に肩をすくめた。

「気味悪いな。お前が素直なんて」

「そりゃねえ・・・なんか迷惑かけてるような気がするし」

「迷惑だよ」

鷹矢はガシガシと頭に手を当てて頭をかいた。

綺麗にセットされていた髪の毛が逆立っている。前髪は綺麗にセットされてたままだ。

「ごめん。ちょっと寝るね」

毛布を広げてソファに横になった美雪を見ながら鷹矢もパソコンデスクのイスに座った。

「この事務室にはオレとアランしか来ない」
つまり安心して休めということだろう。

鷹矢に頷くこともできず、横になるとそのまま眠ってしまった美雪を覗き込んでアランは眉をひそめる。

「よっぽど疲れていたんですね」

「そりゃあな。飛び込みは見るは、霊に付きまとわれるは・・・疲れるだろうよ」

タバコを口にくわえて遠くを見ている鷹矢にアランはコーヒーを差し出した。

「鷹矢オーナーも霊を見るの怖かったですか？」

「ガキだったから、親の布団にもぐりこんだりしてたなあ。一人で寝るとかむりだよな・・・」

ちらりと部屋の隅を見ると、血まみれの少年が佇んでいる。

アランには見えることができないのであえて言うつもりはないし、美雪は気づいていないようだったので彼の存在を知らせるつもりも無かった。

お前はなぜ美雪につきまとうんだ？

心の中で呟いてみても彼に届くはずも無く、ため息をつく。

「サクラのマークの青いブレザーの制服って、桜乱堂高校だったよな」

「えっ？だと思えますけど」

突然、制服の話をされてアランは記憶をたどって頷いた。

「そういえば、最近雑誌でその高校の事見ましたよ。なんだったかなあ・・・結構怖い記事でイジメとかそういう内容だったかと」
「雑誌？」

「ええ、毎週出ているゴシップ誌なんですけど・・・写真付きで2ページぐらいの記事でした。そこで顔にモザイクはかかってましたけど」

「苛められてたA子さんが行方不明でイジメが原因だったとか・・・」

「イジメねえ・・・。なんかありそうだな」

「まったく、超目立ってんじゃない」

ブツブツと文句を言いながら美雪は隣に立っている鷹矢を見上げる。
「しかたねえーだろ。手がかりはこの学校の制服着てた男の霊と、
ソレを冷めた目で見ていたあの女なんだから」

「でも、こんなこととして見つかるの？その女のこ」

ピンク色のジャケットに手を突っ込んでガードレールに寄りかかっている美雪は不満そうだ。

鷹矢が駅でみかけた冷めた口調の女を捜すべく、桜乱堂高校の校門の前で帰宅している学生を待ち伏せするという鷹矢に無理やり付き合わされているのだが、2時間経ってもその女が門から出てくる様子は無い。

鷹矢の車の中で待機しつつ待つことができるのだとおもっていたが、実際は門から少し離れた通りに立っている。

「車で待とうよ」

「あんなデカイくるまこの路地に置けないだろ」

サングラスを押し上げて言う鷹矢に返す言葉がなかった。

鷹矢の姿はタダでさえ目立っているのもこの場に居たくない理由だ。黒い細身のスーツに銀のアクセサリを腕にも首にも耳にもつけて、

サングラスで顔をかくしているものの女うけしそうな顔をしているのは

わかる。

少し長めの髪の毛は綺麗にセットされている。

女子高生ぐらいの年齢の子供達から見たら、少女漫画に出てくるようなイケメン男子だ。

門から出てくる鷹矢を見て女子高生達が顔を赤らめてヒソヒソと話している。

そして隣に居る美雪を見て何かヒソヒソと話しているのに居心地の悪さを感じていた。

「あたし、帰ってもいいかな」

「オレをこの場に置いていくつもりか？半分はお前のためでもあるんだぜ」

「……わかってる」

鷹矢が無償である男の霊をなんとかしてくれようというのはわかるのだが、女子高生の視線が痛いのが嫌なのだ。

「ぜったいに、ホストに貢いでいるバカな女とか思われていると思うんだよね……」

「……ホストに見えるかあ？オレ」

首を傾げる鷹矢に冷たい視線を送った。

「このスーツかな？もっとリーマンみたいなスーツならみえねえのかな？」

自分のスーツを見て言う鷹矢に首をふった。

黒いスーツに紅いワイシャツを合わせている辺り普通じゃない。

ワイシャツのボタンはかなり空いており鎖骨が見えている。

「いや、違うと思う。もう全身からホストって感じがする」

「そういうもんか？」

「あんた自覚ないの・・・？」

冷めた視線から顔をそらして咳払いを一つ。

「いやあ、・・・霊関係の仕事に行くと大抵胡散臭い目でみられるからこういう仕事の時は普通の人っぽくしてんだけどなあ」

「普通の人ねえ・・・」

髪の毛は黒いが、青い瞳が胡散臭さを増している。

「まず、そのアクセサリが胡散臭いのよ。百歩譲って、売れないミュージャンにしかみえない」

不満そうにポケットに手を突っ込んでタバコの箱を取り出した鷹矢の手を叩く。

「ちよっと、学校の門の前でタバコはまずいんじゃないの？」

「・・・やっぱりそうおもうか？」

「思うわよ・・・」

「喫煙者にはキツイ世の中になったもんだ・・・あ？」

タバコをポケットに戻そうとして門から出てくる茶色い髪の毛の女学生を見つけて美雪の肩を叩く。

「アノ子だ」

「ちよっと行って来る」

胡散臭いホスト風の鷹矢が声をかけるよりは美雪が行ったほうが安心するだろうとのことで、走り出した美雪は
門から出てきた女を捕まえて、何か話すと 女は今気が付いたかのように鷹矢を冷めた目で見つめてきた。

この世に希望を持っていない瞳に鷹矢も冷めた視線で彼女を見る。

「嫌な目をしてやがる」

死んだ霊の目と同じだ。

ふと、幼い頃、霊が見えおびえていた頃を思い出した。
あの目が怖かった。

希望も、夢も何も無い黒い瞳。

「お待たせ」

小走りに戻ってきたのは美雪一人。

「あの女は？」

「関係ないって言われちゃった……」

「拒否られたのか……」

舌打ちをしながら言う鷹矢に美雪はヘラヘラと笑みを浮かべVサインを出した。

「それでも、情報ゲットしました。いえーい」

「イエーイってお前……」

一体何歳だよというという言葉を飲み込んで、代わりにため息を一

っ。

「まあ、いいや。とりあえず、茶しようぜ。疲れたよ」
「そうね」

2時間も出待ちをしていたのだ、秋とはいえ夕方の風は冷たい。
ズズッと鼻水を吸って 黒いベンツへと乗り込んだ。

「いい店じゃない。ファミレスだけど」

案内されたのは窓際の座席。大きな窓からは海が見える。
赤い夕日が海を照らしている。

「オレのお気に入りのお店」
「ふうーん。ファミレスだけど、海が見えるし景色がいいわね、ファミレスだけど」

ファミレスを連呼する美雪を睨みつけた。

「うるせえな。何が言いたいんだよ」

「いいベンツ乗ってくるくせに、ファミレスなんてくるんだあ」

「そりゃ、来るだろうよ。どこの王子様だよ。ファミレスもマックも行かないヤツにみえるわけ？ オレは」

「見える」

美雪は大真面目に頷いた。

髪の毛こそ黒いが、サラサラの少し眺めの髪の毛。

青い瞳、日本人離れした顔立ち。

その辺のタレントよりも綺麗な顔をした男はおとぎ話に出てくる王子様と言われても納得できそうだ。

声さえ出さなければ。

美雪は、じーつと鷹矢の顔を見て付け加えた。

「話さえしなきゃね」

「あ、あたしもほっとコーヒー」

お互い同じドリンクバイキングをたのんで、飲み物を取りに行く鷹矢に美雪はニツコリと取ってきて！と微笑んだ。

「おまえなあ・・・」

何様のつもりだよと言いかけて、またため息をつく。

言い合いをしても疲れるだけだ。

サングラスを外してポケットに突っ込んだ。

「あの・・・何か足りないものはありますか？」

ドリンクバイキングコーナーでコーヒーを入れていると店員の女が顔を赤らめながら声をかけてきた。

「いえ、大丈夫ですよ」

カチツとホストスイッチが入り、ニツコリと笑って答えれば店員は顔をますます紅くして頭を下げて去っていく。

そうだ、自分に対しての女の態度はコレが普通だった。

あの美雪という女の態度は一体なんなんだ？

鷹矢はため息をついてホットコーヒーと砂糖を嫌味のつもりで10本掴んでトレイに乗せた。

「おお、ありがとう」

コーヒーを持っていくと携帯電話を弄っていた美雪が顔をあげる。

「まったく、オレを使うとはいい度胸だな」

「ゴメンゴメン。でも、可愛い女店員に声かけられてたじゃん」
「あたりまえだ、オレを誰だと思っている」

「それより、見てよ」

美雪は携帯電話を渡す。

黒い携帯電話に付いているストラップの数に嫌そうな顔をする。

「なんだよ。ストラップつけすぎじゃねえ？」

「いいから、メールがきたの。あの校門のところで待ち伏せした子よ。高岡 幸子っていうんだって」

「メール交換したのか」

良くあの場でメールの交換などしていたなと感心して携帯電話の液晶に目をやる。

そこにはURLが一行だけ表示されているだけだった。

「なんだよこれ」

「なんかさあ・・・アノ子に何か知らない？って聞いたら学校では話せないからって送ってくれたの。コレ見ればわかるわよだって」
アドレスにアクセスするも何も出てこない。

「これ、パソコンじゃないと見れないみたいなの」

「車からパソコンとってくる」

愛車のベンツからノートパソコンを取ってきた鷹矢が席に戻ると、10本あったはずの砂糖の封が全て空いて机に転がっていた。

「まさか全部入れたのか？」

「ん？そうだけど」

当たり前のようにコーヒーをすすっている美雪をみて顔をしかめた。

「太るんじゃないのか？」

「絶対に太らない。太らない」

暗示のように繰り返して言うのでこれ以上突っ込むのはよそうと鷹矢はうなずいた。

「・・・あ、そ」

多めに持ってきた砂糖だったが一杯に10本も砂糖を入れる人間をはじめてみた。

一体どんな味がするのか想像もつかない。

鷹矢は顔をしかめつつ、ノートパソコンの電源を入れた。

「ネット使えんの？」

ソファアを移動して隣に座ってノートパソコンを覗き込んできた美雪。

「あたりまえだろ。そういう契約してあるの」

「ふーん」

携帯電話に表示されているアドレスを打ち込んでエンターキーを押す。

しばらくしてノートパソコンの画面が真っ黒になった。

「・・・電源落ちた？」

顔を近づけて見る美雪の頭を思いっきりチョップした。

「いたっ」

「みえねえんだけど」

「画面真っ暗だよ」

「なにかあるはずだ」

霊能力のカンが何かを告げている。

鷹矢はじっと画面を見つめる。

相変わらず画面は真っ黒だ。

「ちょっとかして」

横から手が伸びて、カチカチとマウスを動かした美雪。

画面にはもう一つウィンドウが立ち上がり、英語の羅列が表示されている。

「なんだこれ？」

「html。ホームページの言語ってやつかな・・・」

「ああ、なんか聞いたことある」

人間一つぐらいとりえがあるもんだと関心していると、美雪は慣れた手つきでキーボードを叩き始めた。

「あった。ほら、ここアドレスが隠されてたんだよ」

綺麗にネイルされた指で画面をなぞるあたりを見ると、ホームページのアドレスだけは鷹矢にも見ることが出来た。

「これを、コピペしてっ・・・」

かちやかちやと音を立てて打ち込んで、美雪は最後にエンターキーを押した。

画面が切り替わり、一瞬の光の後に写真が表示された。

上から見下ろした町の映像、ビルらしきエレベーター、地下鉄の駅、学校、学校の机に置かれた花、パソコン。

10秒ほどの間隔で画像が切り替わっていく。
写真はカラーで色が付いている。

そして、画面に コレを見たものは10日以内に死ぬという文字が
現れ真っ暗になった。

「なに、今の・・・それに女の声が聞こえるきがしたんだけど」

「・・・無音じゃなかったか？」

不思議そうな鷹矢に美雪も不安になってもう一度画面をだした。
ビル、エレベーター、地下鉄の駅、学校、学校の机に置かれた花、
パソコン。

そして10日以内に死ぬという文字が現れる。

「声なんて聞こえるか？」

もう一度画面を開いて、画像を見ていく。全ての画像が終わった後
文字が出るまでの一瞬の間に美雪は「ココ!」と
言ったが、鷹矢には聞こえないようだ。

「霊の声・・・ってやつだな」

オレには聞こえないと不満そうにしている鷹矢に満面の笑みを浮か
べて甘いコーヒーをすすった。

「教えてあげようかあ。なんて聞こえるか」

ブスツとして鷹矢は頷くと満足そうに微笑む。

「良く聞こえないんだけど、誰も信じてくれない、あたしは殺され
る。信じてくれない、バカにしたヤツラ全員殺してやる」

って・・・女の子の小さい声が聞こえる」

「・・・誰も信じてくれない・・・か」

鷹矢は呟いて、またパソコンの画面を眺めた。

「・・・」

何十回と繰り返し、切り替わる写真を眺めていたが隣に座る美雪がアッと声を上げる。

何事かと、パソコンの画面から美雪をみると青ざめた顔で鷹矢を見ていた。

「なんだよ」

「・・・もしかして、コレ見たら本当に死んじゃうのかな・・・」
「・・・かもな」

男子高校生は、このサイトを見て死んだのだろう。

「期限は10日間か・・・それまでにこの呪いを解かないと俺達も死ぬかもしれねえな」

「・・・どうしよう」

美雪は今にも泣きそうな顔をしている。

男子高校生の死を見ている美雪に掛ける言葉も無く鷹矢は何度目かのため息をついた。

「お前さ、パソコン得意？」

頷いたのを確認して、鷹矢はパソコンの電源を落とした。

「この画面に出てくる写真をプリントアウトしてくれないか？」

「わかった」

「この場所が何処にあるのか探そうあと、ホームページを作ったやつも・・・」

・だな」

「・・・うん」

元気が無くなった美雪に鷹矢は安心させるように笑みを作って顔をのぞきこんだ。

大抵の女はコレで落ちた、ホスト時代に使っていた業だ。

「・・・何笑ってんのよ。気持ちわるい。それに顔が近い！」

が、この女には通用しなかったか。

鷹矢は舌打ちして美雪を睨みつけた。

「せっかく、慰めてやってんのに」

「慰めるを間違ってたけど」

「お前以外の女は大抵顔を紅くして全てを忘れたんだけどなあ」

一体どういう生活をしてきたのかと美雪は軽蔑の眼差しを向ける。

「あんたさあ、バカでしょ。やっぱり裏方とかいって今でもホストやってんじゃないの？」

「やってねえーって」

「女は嫌いだとか言ってる、大好きなんじゃない」

「あんなあ・・・」

ガシガシと頭をかいていてまた大きなため息をついた。

7

大急ぎでクラブ聖に戻り事務室のパソコンを使って、写真をプリントアウトしている間に鷹矢はソファで眠ってしまったようだった。

「できた」

後ろで寝ている鷹矢を起こさないように小さく呟いて、プリントアウトした写真をまとめる。

パソコンは誰が使うかわからないので、履歴を全て消しておいた。もし、本当にサイトを見ただけで死んでしまうのだったらこれ以上の被害は出したくない。

「おはようございます」

出勤してきたアランは笑顔で頭をさげる、美雪も頭を下げた。

「あれ、鷹矢さん寝てるんですね。珍しい」

ソファで寝ている鷹矢を眺めてアランは驚いた顔をした。

「昨日からあんまり休んでないもんね。私も眠いけど、この人は全く寝てないんでしょう？」

「霊はまだ居るんですか？」

二人分のお茶を入れて言うアランに首をふった。

「それが、居ないのよ」

「よかったですね、もしかしたら、もう出ないかもしれませんよ」

まるで自分の事のように喜んでくれているアランに美雪は顔を曇らせた。

「そうもいなくなっちゃってさ・・・」

美雪が今までの出来事を話すとアランはプリントアウトした写真を見せてくれと言ってきた。

「・・・この写真の学校は桜乱堂高校じゃないですか？」

「えっ？」

学校が映し出された写真をまじまじと見て言うアランに美雪も写真を覗きこんだ。

何処にでもあるような学校だ。

この写真一枚では何処の学校までは判明できない。

アランは写真をまじまじとみてもう一度頷いた。

「その高校、今日行ってきたけど・・・こんなだったかなあ？」

「間違いないと思いますよ、週刊誌でこの学校の事件をみたことがあります」

「事件？」

アランは頷いて、事務所の隅に置いてあった雑誌の束から週刊雑誌を取り出してきた。

パラパラとめくって、本を美雪に渡す

2ページに渡って書かれている記事の見出しは「謎の連続死。なぜ

？」というタイトルだった。

「O高校、今月に入り7人の自殺者。電車に飛び込みだって・・・」
記事を読んで美雪が言うのアランは頷いた。

「前にその記事を読んだ記憶があったので、この雑誌探しておいて
正解でしたね」

「呪いのサイトについては全く書いてないわね。A子さんが謎の失
踪をしてから、次々と生徒が自殺。

A子さんはイジメにあっていたらしいって・・・結局この記事は
イジメの闇についてしか書かれていないわね」

「さすがに、”呪いのサイト”を記事にはできなかったんですかね」
アランが出してくれたコーヒーにたっぷり砂糖を入れるてスプーン
でかき混ぜる。

「だって、呪いとかバカバカしいものね・・・。記事ではイジメを
していた生徒が自責の念で自殺した・・・だって」

「あの男の子の霊もイジメをしていたってことですかね？」

「そういう子に見えなかったけど・・・。この学校を調べてみたら
何かわかるかしら・・・」

美雪は小さくあくびをして雑誌を眺めた。

失踪したA子さんの写真にはモザイクが入っており顔を確認するこ
とは出来ない。

「イジメ・・・ねえ。ちょっと探してみるか」

コーヒーを持ってパソコンの前に座るとカチカチとキーボードを叩
き始める。

「なんですか？」

「裏サイトっていうか、こういうのって掲示板とかに書いている人がいるかなあって」

「なるほど」

パソコンの画面には、桜乱堂学校の謎というタイトルで掲示板が建てられていた。

お互いの情報交換も含めて書いてあるようだ。

マウスをグリグリと操作しながら真剣に画面を見る。

学生達が集まる掲示板ですぐに探すことが出来た。

学校に通っている生徒達が情報交換で使っているようだった。

第三者が書き込むより信憑性がある。

「ヤベッ。寝すぎた！」

声を上げて飛び起きた鷹矢に美雪は軽く手を振る。

「おはよー」

「おはようじゃねえーよ。今何時？」

「もうすぐ10時。夜のね」

「やべー。寝るつもり無かったのに」

ガシガシと頭をかいて起き上がると掛けられていた毛布が床に落ちた。

不思議そうに毛布を拾ってアランに渡す。

「悪いな。かけてくれたのか？」

「いえ、僕じゃないです。僕が出社したときには掛けられていますよ」

「ってことは、お前が？」

信じられないというように見られて美雪は頬を膨らませた。

「あんたねえ、私をどういう人間だとおもってんのよ」

「悪い悪い。で、写真はできたか？」

プリントアウトした写真と週刊誌の記事を見せる。

「いじめねえ」

鷹矢は呟いて タバコに火をつけた。

「で、ネットでいろいろ調べたら凄いことが解ったわよ」

「ネットか・・便利な世の中になったよなあ」

しみじみ呟く鷹矢に美雪も頷く。

「私が高校生の頃なんてネットとか無かったわよね。携帯もなかったし。最近の子は携帯とかパソコン使って掲示板にいろいろ書き込んでいるのよ。匿名だから書きたい放題かいているんだけどね」

「いい世の中なんだか、悪いんだかわからんな」

「で、さすがに一ヶ月で7人も自殺している学校だから掲示板が沢山たってたんだけど凄いことがわかったわよ」

興奮気味に話す美雪に頷いて、タバコの煙を口から吐き出す。

「何が凄いな？」

「まず、A子さんは霊が見えるって言っていたらしいわ。A子さんはサイトを持っててそのサイトが多分あのサイトだと思うの。」

その、サイトを見た人たちが死んでいるみたいなのよね」
「なるほど」

鷹矢は頷いた。

「でも、サイトを見ただけで死ぬものなんですか？」

もつともな意見をいうアランに鷹矢はうなずいた。

「ありえない話じゃないな。A子は靈感がもともとあったんだろ？
だが、ネットを使ってっていうのは初めて聞いたぜ」

「心霊の世界も進化しているのね」

しみじみ言う美雪にアランは笑う。

「たしかにそうですね。メールとか、ネットとか使って心霊現象を
起こすなんてすごいですねえ」

「本当」

「だから厄介なんだよ」

鷹矢は一人呟いて、ため息を付いた。

「とりあえず、そのサイトを消さないとまずいな・・・」

「そうですね、誰かが面白半分に見てしまう恐れがありますね」

アランの言葉に美雪は思い出したようにパソコンを叩いた。
慣れた手つきで、呪いのサイトを開いて首をかしげている。

画面には このページは削除されたおそれがあります。と表示されていた。

「無くなってんのよ」

「はあ？」

鷹矢もパソコンを覗き込んでアドレスを再度入力するも、ページは出てこなかった。

「この店に帰ってきた6時ごろは確かに見れてたんだけど・・・9時ぐらいには見れなくなってたわ」

冷めたコーヒーを飲みながら美雪は続けた。

「ちなみに、掲示板ではサイトを見ないほうがいいって注意されたの。」

でも、中には勇気ある子が見たらしいけど 無くなってたって。えーっとA子さんが失踪して2週間後にサイトが消滅しているみたい」

「どうして俺達は見れたんだよ」

「わからない、もしかしたら一瞬だけサイトが復活した・・・とか？」

首をかしげている鷹矢と美雪の後ろからアランがおずおずと声をかける。

「もしかしたら、今日会ったという女の人がサイトをアップしたんじゃないですか？」

「どうして彼女が？」

美雪が言うのアランは首をかしげる。

「さあ？」

「でも、ありえない話じゃないわね。掲示板の話が本当だとしたら、A子ちゃんのサイトは彼女が失踪した後に中身が変わっていたみたいだし」

「中身が変わってた？」

「うん、もともとのサイトは心霊サイトだったみたいなの。何処にでもあるような、怖い話とか写真とかのサイトだったんだけど」

A子ちゃんが失踪してからそのサイトは私がみたような、写真が切り替わって”10日以内に死ぬ”っていうのに変わってたらしいわ」

美雪の話聞きながら鷹矢はソファに座って目を瞑る。

しばらく考えて、口を開いた。

「まず、A子って可愛い女子高生が居た」

「可愛いかなあ？」

口を挟んできた美雪に鷹矢は週刊誌の写真を開いて指差した。

「顔モザイクかかってっけど、可愛いぜ！これは」

週刊誌の写真は手入れをされた少し茶色の髪の毛が綺麗に巻かれている。

今時のお洒落に敏感な高校生というかんじだ。

「たしかに・・・」

じーっと雑誌を見つめて頷く美雪に頷いて、鷹矢は続けた。

「A子ちゃんは、霊が見えてた。ソレを学校で公言して苛められた。イジメを苦に自殺して、霊になったA子ちゃんは

見たものは死ぬっていうサイトを作った、見た人が死んだ」

「霊ってサイトとか作れるんですか？」

アランの質問に鷹矢は顔を引きつらせた。

「できるんじゃないかな？」

「いやいや、無理でしょ！霊がパソコン触れるの？」

「気合できんだろ。ほら、念写とか言って念力で写真とったりするじゃん。アレと一緒にだよ」

「無理でしょ。良くテレビで見るのはぼやーっとしたやつじゃない。サイトなんて作れるはず無いじゃない」

「A子さんじゃなくて、今日会った子で作ったのかもしれませんが」

「それに、A子ちゃんが自殺したなんてどこにも書いてないじゃない。失踪よ」

アランと美雪が交互に言うのを聞いていた鷹矢はポンと手を叩いた。

「わかった！A子ちゃんはどこかで生きていて、サイトをアップした。しかし、まさか自分がのろった相手が自殺してしまって、出て来れなくなった」

「・・・うーん。それが一番ありそうな感じね」

美雪は頷くとアランはまだ納得がいかないように首をかしげた。

「しかし、A子さんはまだ学生ですよ。雲隠れするにもどこに？お金も無いでしょうし・・・」

「うーん」

「そうよ」

美雪は頷いた。

「それにサイトを見たときに聞こえた女の霊の声は？あれはA子ちゃんだとおもうけど！」

「うーーーん」

腕を組んで考え込んでしまった鷹矢に美雪はため息をついてお手上げというように両手を挙げる。

「全く解らないじゃない！」

「ごめんね。呼び出したりなんかして」

渋谷の駅の交差点で美雪は軽く手を上げて微笑んだ。
高岡幸子は軽く頭を下げてボソリと呟いた。

「べつに。ヒマだったし」

休日だというのに制服姿の幸子。

「今日学校だったの？」

「午前中だけ・・・」

「そう、どこかお茶しましょうか」

美雪の言葉に幸子は軽く頷いた。

「で、メールで軽く話したとおりなんだけど・・・頭がおかしいとか
思わないでくれる？」

ほっとココアを飲みながら言う美雪に軽く頷いている。

幸子の手には、生クリームが乗ったコーヒード。

クルクルとかき混ぜながらボソリと呟いた。

「別に・・・霊が見える人。初めてじゃないし・・・私もたまに見
る」

「え？ そうなの？」

幸子には、自殺した男の子の霊をみてしまい困っている、そして例のサイトを見てしまい困っていることを伝えてあった。驚いた幸子に、興味なさそうにうなずいた。

「たまにしか見ないけど・・・でも、誰にも言わない。変人に見られるから」

「そう・・・」

A子ちゃんは、霊が見えるといったせいでイジメにあったことを思い出し声のトーンが落ちた。

「悪い。遅れた」

サングラスを外してやってきたスーツ姿の鷹矢が店に入ってくるなり一直線に美雪と幸子が座っている席へと歩いてくる。

数人の女が興味ありげに彼を見ている。

どこに居ても目立つ男だ。

「この人、前も会っていると思うけど ウンコ鷹矢さんだっけ？」

美雪が隣に座った鷹矢に微笑みながら言うと、ギロリと睨みつけながら低い声を出す。

「お前、オレに殺されたいのか？」

「あらあ、ごめんなさい。お名前間違えたかしら。ウンコじゃなかった？」

「ショウウン タカヤ！ 勝運 鷹矢だ」

よろしくねと笑いながら前に座る幸子に微笑む。

「高岡です」

幸子は、顔を紅くするでもなく、興味なさそうに頭を下げる。

駅で見かけた時と印象がだいぶ違って見えた。

相変わらず、霊のような 暗い瞳をしているが常識はあるようだ。

「幸子さんも霊がみえるんですって」

「へえ……」

美雪の言葉に鷹矢は少し驚いて彼女を見た。

居心地悪そうに視線を落としている幸子に美雪は声を小さくして言う。

「変人にみられるから、あまり言わないみたいだけど」

「そうだな。あんまり言わないほうがいいかもな。オレも酷い目に会ったことが多々ある」

鷹矢の言葉に幸子は顔を上げた。

「オレも昔から霊が見える人だよ。ちなみに、修行してるから払ったりできるから困ったことがあったら相談して」

「でも、霊の声は聞こえないんですって！」

ケラケラと笑う美雪に鷹矢はギロリと睨んだ。

そんな二人を見て幸子は少し微笑む。

初めて見せた表情の変化に、鷹矢も美雪もお互い顔をあわせた。

「普通、霊の声は聞こえないみたいですよ。あたしも聞こえませんが……」

「え？ そうなの？」

幸子の言葉に驚いて鷹矢をみると彼も頷いた。

「だな。ま、今回だけだとオレは思うけどな」

「サイト……見ちゃったんですね」

「見ちゃいましたけど……やっぱり、あのサイトのせいで死人が

出てるの？」

「多分・・・」

「A子ちゃん、苛められてたらしいけど・・・A子ちゃんとは仲がよかったのかしら？」

美雪の言葉に幸子はコクリとうなずいた。

「A子っていうのは雑誌に出てた名前。本当は明子っています」

「明子ちゃん・・・」

鷹矢は呟いて腕を組んで長い足を組んだ。

「明子は、私と同じ霊が見えるからすぐに仲良くなりました。イジメなんて無かった。

週刊誌が書いていたのは殆どウソ」

「ま、そうだとおもったよ」

昨日、A子はイジメを苦に自殺したなどと言っていたのによく言うもんだと、美雪は隣の男をチロリとみた。

「でも、最近になって明子はおかしなことを言い始めたんです。声が聞こえるって・・・沢山の人の苦しむ声が・・・。

私を連れて行こうとしている。怖い、怖いって・・・。明子はノイローゼみたいになっちゃって、授業中も急に

叫んで立ち上がったたりして・・・それから2週間ぐらいして明子は学校に来なくなりました」

「来なくなった？」

鷹矢の言葉に頷く。

「はい。家にも居ないので、捜索願を警察にだしたそうです」

「本当に失踪してたのね・・・」

「あのサイトは？」

鷹矢が問いかける。

「私と、明子の二人でサイトを運営していたんです。心霊サイトなんですけど、クラスのみんなも面白がって

見に来てました。明子が行方不明になった時にクラスメイトの一人がサイトが変だって言ったんです。

写真が切り替わって、最後に”10日後に死ぬ”って出るって。面白がってみたクラスメイト7人が10日後に本当に死んでしまったんです……。電車で飛び込んで・・・」

思い出したのか、かすかに幸子の手が震えている。

「幸子ちゃんはそのサイト見てないの？」

「・・・クラスメイトが、サイトが変だって言っている時パソコンが壊れていて見れませんでした・・・」

それでも、サイトが気になって4日前に見たんです。明子と私がデザインしたサイトと全く変わっていました。

怖くなって、サイトを消しました・・・でも、あなた達に会った時にどうせ雑誌記者だろうと思って一時的にサイトをアップしたんです。

でも、また死んだらどうしようと思ってすぐにサイトを消したんです・・・」

「でも、俺達は見ってしまった・・・か」

呟いた鷹矢に幸子は頭を下げた。

「ごめんなさい。私のせいで、死んでしまうかもしれない」

今にも泣き出しそうな幸子に困ったように隣に座る鷹矢を見る。

鷹矢は軽く笑った。

「気にするな。オレが全部解決してやるよ。オレはこういう妙な事件を解決するのが得意なんだ」

「え？ そうなの？」

驚いて声を上げた美雪に鷹矢は頷く。

「そうですよ。幸子ちゃんも俺達も死なない。期限までになんとかしてやるさ」

鷹矢がニツコリと微笑むと幸子は安心したかのように微笑んだ。

「笑ってた方がかわいいぜ」

「なに言ってるのよ。高校生に」

どこまでのタラシ性質なんだと呆れた美雪に鷹矢は肩をすくめた。

「なによ・・・」

まだ眠っているようなむくれた顔で玄関から顔を出したパジャマ姿の美雪に鷹矢は腕を組んで上から下まで眺めてため息をついた。

「もう14時過ぎてんだぜ、何時間寝るつもりだよ」

「うるさいわねえ・・・疲れてんだから・・・」

もう少し寝かせてくれといいながらドアを閉めようとすると、強い力で押さえつけられる。

「お前暢気だな、あと8日で俺達死ぬかもしれないんだぞ。寝ている暇などあるか」

「だって、どうすりゃいいのよ」

まだ眠っている顔の美雪に鷹矢は写真をヒラヒラさせる。

「オレのツテを使って、この駅がどこかわかったぜ」

「・・・駅なんてどこでもいいでしょ」

ぼーとした様子の美雪にため息をついて鷹矢は勝手に部屋に上が

りこむ。

止めることもせず、美雪もフラフラと玄関から部屋へと入ってきた。

「きたねえ部屋だなあ」

飲みかけのペットボトル、食べかけの弁当が机に置かれている。

ご飯がカチカチになっているところを見ると、時間がかなりたっているようだ。

「だって、片付ける前にあの霊がいるから怖くてなにもしないわよ」

ヤットのこととて目を開けている美雪は初めて鷹矢の雰囲気が何か違うことに気づいた。

「スーツじゃないんだ」

「今日は仕事休みだ。そんなことより、顔でも洗って来い。目覚めるだろ」

「ん」

黒い細身のスーツではなく、色あせたジーンズにピタピタの黒いシヤツ、ジーンズには銀のチェーンがつけられている。

首にはなぜか長いストールが巻かれていた。

最近の流行なのだろうか。

どうも流行はわからないと呟きながら、顔を洗うべく洗面所へと向かう。

「で？何？」

スッカリした顔で戻ってきた美雪にやっと話しができると鷹矢は腐りそうな弁当をよけて写真を机に並べた。

「順番に意味を考えたんだ」

そういつて、順番通り写真を並べる。

ビル、エレベーター、地下鉄の駅、学校、学校の机に置かれた花、パソコン。

「えーっと、まず、ビルは意味不明。エレベーター意味不明」
そういつて写真をはじいていく。

「なんにも解ってないじゃない・・・」
ジトツと睨まれて、鷹矢は咳払いをした。

「で、地下鉄の駅なんだけど、これ、幻の駅らしい」
「幻の駅？」

「そう、作っただけ結局使用されてない駅。東京の地下にはそういうのゴロゴロしているらしいぜ」

「都市伝説の見すぎじゃないの？」
「本当だって」

「ほら、よくあるじゃない。都市伝説で戦時中、物資を運ぶ為にあった路線とか、主要人物が逃げる為に地下に専用の線路があるとかでしょ？」

「そう、それぞれ、都市伝説なんかじゃなくて、実際あるの。

で、ここは多分 東京の地下鉄とある駅と駅の間にある幻の駅なんじゃないかって言ってた」

「駅の名前をちゃんといいなさいよ」

「ま、それは置いておいて」

鷹矢は適当にごまかして写真をずらした。

「学校の写真は、明子が自分がここに通っていたって知らせたかったからかなあと・・・」

「机の上に置かれた花は？」

「もう、死んでますよ・・・かな？」

不吉なことを言う男の顔をみると自信なさそうに写真を眺めている。

「・・・はあ、結局何が言いたいのよ」

「この駅に行こうっていいたいの」

写真を持って言う鷹矢に美雪は諦めた様子でうなずいた。

「それしか手がかり無いんじゃないかね」

「じゃ、行くぜ。この家、茶すらでないしな」

小さなキッチンを指差して美雪は鷹矢に冷たく微笑む。

「どうぞ、ご自由に入れてください」

「もてなしの心が足りないな。ったく、オレに茶入れさせる女なんでお前が初めてだよ」

「恵まれすぎてんのよ、今までが」

「オレが茶のみ終わるまでにしたくしろよ」

勝手にテレビをつけて言う鷹矢を見ながら着替える為に寝室の扉を閉めた。

9

「そのピンクのジャケット派手じゃない？」

助手席でボリボリとお菓子を食べている美雪をチラリと見て言う鷹矢。

昨日も同じジャケットを着てたなど思いながらハンドルを握る。

ジャケットの下は黒いプリーツスカートにブーツという普通の格好なのだが、ピンク色のジャケットはどうなのだろうか

疑問に思っていたのだ。

「いいじゃん。可愛いでしょ？この色」

「ショッキングな色だよな。目がいてえよ」

「サングラスしているから痛いはず無いじゃない」

「しかも、オレの車でスナック菓子食うとか・・カスが落ちるだろうが」

嫌そうな顔をしている鷹矢にお構いなしと2袋目”チキンラーメン”の袋をあけた。

またボロボロ落ちそうなものかと思いつながらハンドルを握る。

時刻は17時半。

すでに日は落ちている。

ダッシュボードの上に置かれていた鷹矢の携帯電話が着信を知らせる音楽が鳴った。

ピコピコと電気が点滅している。

「聖って人から電話だよ」

スナック菓子を食べていた手で携帯を持ち上げる美雪。

「運転中だから、お前出て」

「えっ？」

「大丈夫、お前のことは聖さんには伝えてあるから」

何を話しているのか多少の不安を抱えつつ、通話ボタンを押して受話器に耳を当てる。

「お待たせしました。鷹矢オーナーの携帯です」

『・・・もしかして、美雪ちゃんかな？』

低くて優しげな声が携帯から聞こえてきた。

「は、はい」

色っぽい声に美雪の顔が赤くなる。

『鷹矢は運転中？』

「は、はい。そうです」

『あとどれぐらいで目的地につきそう？』

「ちょっとお待ちください。ネーどれぐらいでつきそう？」

鷹矢は前を向いたまま短く答えた。

「10分ぐらい」

『もしもし、10分ぐらいだそうです』

「そう、オレたちもう着いたからって伝えておいて」

「は、はい」

顔を赤らめて美雪は携帯電話をきった。

「なあーに、顔あかくしてんだよ」

「聖さんって、すっごくイケメン声じゃない？」

いつもより高めの声を出している美雪にげんなりしつつハンドルをきった。

「声だけじゃなくて、全部がイケメンだ。王子様って本当にいたんだあーってオレ思ったからな」

「いやーん。すっごく会いたい」

乙女モード全開の美雪は鞆からお化粧道具を取り出して化粧直しを始めている。

今更化粧しても無駄だろうに思いながら、カーナビの音声にしたがつてハンドルを切った。

「おら、着いたぜ」

同じ種類のベンツの後ろに車を停めて車のエンジンをきる。

助手席に座っている美雪の顔を何気なく見ると、お化粧直しを一生懸命していたわりにはどこが変わっているのかさっぱりわからなかった。

鷹矢が車をおりると、スーツ姿の男が通りの向こうから手を上げているのが見える。

「あれが聖さん？」

鷹矢の隣に並んで歩き出した美雪に聞かれて鷹矢は首をふる。

「いんや、聖さんの店のNO1ホスト　愛紀だ。聖さんはその隣に居る金髪の人」

歩きながら通りの向こうにはスーツ姿の男が数人立っていた。スーツ姿といっても、サラリーマンという雰囲気ではない。夜を生きる男の姿だった。

金髪の人が聖さんといわれても、遠すぎて顔は見えない。

「聖さんもホストなの？」

「オレと同じように裏方。オレの店は聖さんに任されているの。オーナーについても聖さんに雇われているってかんじかな」

「へえ・・・凄いのね」

「聖さんは、オレより凄いぜ。歌舞伎町では伝説化しているからな」

髪の毛を整え始めた鷹矢を見上げる美雪に緊張気味に言う。

「一応、上司に会うんだしキチンとしておかないとな」

鷹矢にそこまで言われると美雪も自分の格好がおかしいのではないかと不安になって聞いてみる。

「あたしは変じゃない？」

「顔が変。ピンクのジャケットが変」

姿もみないで言ってくる鷹矢の背中を思いつき叩いてやる。

「酷いじゃない」

「本当のことだろ」

横断歩道を渡ると、一人の男がニヤニヤと笑いながら話しかけてくる。

スーツ姿に茶色い髪の毛はスプレーで固められている。

「仲いいじゃねえか。鷹矢のホンカノ？」

意味ありげにチラリと見られて美雪は首をかしげた。

「ホンカノ？」

「本当の彼女？って意味」

ご丁寧にニツコリと笑って意味を教えてください。

「この人が、NO1ホストの愛紀」

鷹矢が面白くなさそうに、ニコニコと笑っている愛紀を紹介した。

「・・・NO1ホスト・・・ねえ」

フェロモンを振りまきながら微笑んでくる愛紀を見て美雪は納得して頷く。

このフェロモンと話術があれば通う女もさぞ多かろう。

「こんばんは」

愛紀の後ろから金色の髪の毛の男が微笑んでいる。

アノ人が聖さんかと一目でわかった。声も電話で聞いたのと同じ、低くて男前の声だ。

「こ、こんばんわ。み、美雪と申します・・・」

鷹矢と違ってサングラスをしていない聖の顔をみて体が固まる。
王子様って本当にいるんだ。

鷹矢と同じ感想を言ってしまうようになって慌てて飲み込んだ。

キラキラと外灯に当たって輝いている金色の髪の毛は間違いなく生まれながらの色だと解る。

瞳の色も、不思議な緑色。

そして、整った顔。

まるで人形のような人だ。

「おい、固まってんじゃねえよ」

鷹矢が肘で突つくと夢から覚めたように美雪はハッとして辺りを見回した。

「あれ、あたしなんでここに着たんだっけ？」

「聖さんに見とれて我を忘れたか」

呆れた口調の鷹矢に顔をあかくする。

「・・・ゴメン」

「誰でもそうなるよな。まったく、こんな漫画みたいな人間がこの世に存在するなんて神様も酷いことをするよなあ」

愛紀は両手を広げて肩をすくめる。

「オレなんて、がんばって女を落とす勉強して。顔だって悪いほうじゃないんだが、聖さんと鷹矢と並んだらオレってかっこよくないのかも」

つてたまーに落ち込むんだぜ」
そういって、白い歯を見せて笑った。
つられて美雪も笑ってしまう。

「本題に入ろう」

聖が言うと、愛紀と鷹矢は背筋を伸ばして頷く。

「例の写真の駅を調べたところ、使われていない地下鉄の駅ではないかという説が強い。どうせ、鷹矢のことだそこに行きたいんだろ？」

聖が言うと鷹矢はうなづく。

「手がかりが少ないので、判明した場所から調べようかと思ってます」

「うん。その駅に行くには、線路を歩いていくのが一番いいと思うけど列車が頻繁に通っているみたいだから行かないんだよね」

面白そうに言う聖に鷹矢は苦笑する。

「秘密の通路へと通じている道を特別に教えてもらった。これは他言無用だよ」

そういって背広のポケットから鍵を取りだして美雪に渡す。

キーホルダーすらついていない鍵を受け取って美雪は聖を見た。

「なんですか？この鍵は」

「どんなドアも開く不思議な鍵」

「はあ？」

首を傾げる美雪に慌てて鷹矢が間に入って頭を下げた。

「ありがとうございます」

「で、コレが地図」

5枚のA4のコピー用紙を見ると細かく書かれた通路にピンク色のマーカーで線が引かれていた。

駅までの通路を解りやすくしてくれているようだ。

「……ちょっとまって、もしかしてここに今から行くの？」

ところどころに電車注意やら、細い道注意など書かれているのを見て不安な声をだした美雪に愛紀が気の毒そうな顔をした。

「大変だよなあ。俺達は地下には行かないけど、地上でサポートする予定ではある」

「サポート？」

不思議そうにしている美雪に愛紀は懷からトランシーバーを取り出した。

「これで連絡を取り合う予定。ちゃんとしたヤツだから地下でも大丈夫だともうんだけど」

「……地下でも無線って通じるんですか？」
携帯電話も怪しいのに。

「大丈夫、許可とっているから」

平然と言う聖に美雪は鷹矢を振り返った。
何も言うなよという顔をしてこちらを見ている。

「じゃ、行くか」

愛紀と聖が歩き出したのを慌てて着いていく。

「ちょっと、地下に行くなんて聞いてないんだけど」

隣を歩く鷹矢を睨みつけながら前を歩く聖たちに聞こえないように出来る限りの小声で美雪は言った。

「言ったじゃん。俺」

「スカートはいてきちゃったよ。着替えたいんだけど・・・」

プリーツスカートにブーツ姿の美雪を見て鷹矢は困ったように頭をかいた。

「着替えなんて持ってきてない・・・よな」

「あたりまえでしょ」

「うーん。そんなに大変な道じゃないだろうから大丈夫だと思うよ」

「絶対ウソ！アンタ一人で、ラフな格好じゃない！スニーカーだし。スニーカーなんて普段はかないんでよ？」

「悪かったって！でも、普段のオレはこんな感じよ！？地下に行くからとか、けっこう歩くからってこんな格好なんじゃねえーからな」

「何ケンカしてんだよ。お前ら本当に付き合っていないの？」

ポケットに手をつ突っ込んでニヤニヤ笑いながら振り返った愛紀に二人は同時に声をあげた。

「付き合っていない！」

「ふーん。アランもお似合いだって言ってたけど」

「アランってば、何勝手な事いつてんの？」

頬を膨らませて言う美雪に鷹矢もまったくだと頷いた。

そんな二人を見て 愛紀は「お似合いじゃん」と呟いたが二人には聞こえなかったようだ。

雑居ビルが並んでいる通りを歩き、小汚いビルの前で聖と愛紀は立ち止まった。

「ここですか？」

鷹矢が言うのと聖は頷いた。

「このビルから地下鉄の線路に通じる道にでれるみたいよ。後は地図どおりに行けばいいと思う」

ビルに入っていく聖に続いて、美雪たちも入る。

人の気配が全くしない建物だ。

一階から薄暗い階段を使って地下一階へと降りる。

エレベーターなどは無いようだ。

地下へと降り、すぐ右手の部屋へと入る。

「お疲れ様です」

ノートパソコンに何かを打ち込んでいたのをやめて慌てて立ち上がり頭を下げた人物を見て美雪は声をあげた。

「アラン？ どうしてここにいるの？」

「ヘルプにきました」

「ヘルプ？」

アランも鷹矢もこの場にいるということは店は大丈夫なのだろうか
と不安に思いつつ、改めて部屋を見渡す。

錆付いたディスクが4つ合わさって部屋を中心に置かれており周りにパイプ椅子。

資料室なのだろうか、埃をかぶった棚が並んでいる。

棚にはファイルが置いてあるが、倒れて中身が飛び出しているものもあつた。

良く見れば床にもファイルが落ちており紙が散乱していた。

机の上にはパソコンが数台置かれており、見たことも無い器械も沢山置かれていた。

配線の束に足を引っ掛けないように部屋へと入る。

用意されたパイプ椅子に座って改めて部屋を見ている美雪に聖が言う。

「ここは倒産した会社のビルなんだ。僕が買い取った」

「買いとったあ？」

思わず大きな声が出てしまい、自分の口を塞ぐ。

「す、スイマセン、驚いちゃって」

「この人は偉大なんだ。お前イチイチ驚いてたらキリないぞ」

どこから持ってきたのか黒いヒップバッグに道具を入れながら鷹矢は馬鹿にしたように笑っている。

「机と椅子はこのビルにあったものなんですけど、無線が通じるようにここに基地をおくんですよ」

「はぁ・・・」

アランがペットボトルのお茶を紙コップに入れて美雪の前に置く。机の前で荷物を入れている鷹矢の横にも紙コップに入れたお茶を置いた。

「美雪ちゃん、ちょっといい？」

机に地図らしきものを広げて聖が呼ぶ。

「は、はい？」

状況についていかなくなっている美雪はフラフラと聖の横に座った。

「今居る場所がここなんだ」

綺麗な指で指された場所には青いペンで基地と書かれていた。

そのまま指はマーカーで引かれた線をなぞっていく。

「この部屋から地下に通じる道がある。そこから出て行って、階段を降りていくと東京駅の真下に出るんだ」

「・・・はぁ」

「東京駅に着いたら、普段は使われていない従業員用の通路がある、その通路を通ってまた地下に降りる。そこまでいけば渡した地図だ

けで
も大丈夫だと思う」

「・・・」

不安そうな美雪を励ますように、聖が微笑んだ。
金色の髪の毛がキラキラと輝きながら揺れた。

「大丈夫。鷹矢は強いし、僕達も無線でサポートするから、地下で迷子になることは無いよ」

「迷子って・・・そんなに複雑な道なんですか？」

「迷宮っていわれているらしいぜ。オレも行きたかったけど負担になるからって断られたぜ」

面白そうに言う愛紀に不安になり鷹矢を振り返った。

「やっぱり、ここで待ってる」

「なに言ってるんだよ」

鷹矢はギロリと睨みつけると美雪に鷹矢と同じヒップバッグを渡した。

「オレは霊と戦えるが、霊の声は聞こえない、お前は霊の声を聞くことができる」

「美雪さんも一緒に行かないとダメなんですよ」

アランは机の上に置かれたパソコンを叩きながら言った。
パソコンの画面は見たことも無いソフトが立ち上がっている。
すべて英語表示だ。

「美雪ちゃんが安心して行かれるように、機材を揃えたんだ。鷹矢一人だったらここまでしないよ」

美雪の肩をポンと叩いて聖はニツコリと微笑む。

緑色の不思議な瞳を見つめていると不思議と不安が無くなり美雪は頷いていた。

「このまま何もなかったら8日後にしんでしまうかもしれないんだろ？」

そうだ、あと8日しかない。

だまって、死を待つなんてバカバカしい。

美雪は頷いて自分の手を握り締めた。

「死にたくないんで、行きます」

「僕達もサポートしますから。無線が通じるようにここに機材を運びましたし。GPS機能も搭載したんでどこまで追えるかわかりませんけど」

そういって、アランは無線機を美雪に渡す。

携帯電話より少し大きい黒い無線のボタンを指差した。

「話したいときはこれを押すんですけど、イヤホンをつけるんで、コッチのボタンを押してください」

そういって、イヤホンを渡す。

耳に引っ掛けるようにイヤホンをセットし小さいマイクを上着の襟につけた。

ザザッというノイズが一瞬交じり 耳からアランの声が聞こえる。

「美雪さん聞こえますか？」

「聞こえた!」

思わず喜んだ美雪にアランは眉を潜めている。

「ノイズ混じりますね。マイクも喉に付けるやつがよかったですね・・・外の音拾っちゃいませんか?」

「そこまでこだわる必要ないだろ?」

鷹矢も無線を耳につけてヒップバッグをベルトの上から腰に巻く。普通の若者がする格好だが、鷹矢がするとどこかお洒落に見えるから不思議だ。

「あら、鞆は前にしたほうがお洒落よ」

「オレは秋葉に居るオタクか!」

美雪と鷹矢のやり取りを見ていた聖がクスリと笑った。

「本当に君達は仲がいいね」

「仲良くありません!」

ハモっている二人にアランと愛紀は笑う。

「仲いいですよ」

愛紀は二人を指差した。

「ユー達付き合っちゃいなよ」

「うるせえ!」

嫌そうな顔をしている鷹矢が面白いのか腹をかかえて笑っている。

「準備は大丈夫ですか？」

アランに言われて美雪は頷いた。

自分の鞆から財布と携帯電話、はんかち、ティッシュそして化粧品を渡されたヒップバックに入れ替える。

無線機が入っているとアランが冷たいペットボトルのお茶と水、チヨコレートと乾パンを渡された。

「こんなに入らないんだけど・・・」

「一応、1日分ぐらいの食料を持っていてください」

「・・・・・・」

念を押すように言われてますます不安になり美雪は言われたとおりヒップバックに渡された水と食料を入れた。

すでにパンパンになっているヒップバックを肩からたすきがけにして提げた。

鷹矢と同じ鞆なはずなのに、鷹矢の荷物は少ないような気がする。

「あんた、ちゃんと荷物持ったの？」

「お前より装備は持っているし完璧だけど」

「20時だ」

聖が腕時計を見ていった。

「作戦開始しよう」

ここから行くんですか？」

基地と名づけた部屋にマンホールのような鉄の板を愛紀が退かすと地下へと続く穴がでてきた。

ごわごわと穴をのぞいている美雪の前髪を冷たい風が揺らした。

真っ暗な穴のそこは見えない、細い梯子が地下へとつづいているようだ。

「よっし行くか」

鷹矢は軽く腕を回して言うのと、愛紀とアランは親指を立ててうなずいた。

「がんばれよ」

「お気をつけて」

「ウィツス」

鷹矢も親指を立てて 穴にかかっている梯子に足を掛けて一歩ずつ降りていく。

大きく息を吸い込んで美雪も梯子に足をかけた。

「気をつけて」

聖さんが地下へと続く階段を降りていく美雪に言った。

いつも微笑んでいる印象の彼だが、今は緊張した面持ちで顔に笑みは無い。

「はい」

美雪は頷いて 地下へと続く梯子を降りた。

降り立った地下は真っ暗で、どぶ川の水が流れているイメージだったが実際は薄暗い廊下だった。
電気も通っているようで蛍光灯の明かりが薄暗い廊下を照らしている。

蛍光灯が離れて設置してあるせいか、廊下は暗かった。
窓も無い長い廊下の終わりは見えないが風が前髪を揺らしているのを感じて美雪は息を吐く。
風があれば、窒息死することはない。

「てっきり、下水道に続いているのかと思ってたよ」

腕を組んで降りてくる美雪を見ていた鷹矢に気づいて慌ててスカート抑えた。

「あんた見てたんでしょ」

「見てねえよ。タイツはいているシリなんて見ても楽しくないしな。
おら、行くぞ」

さっさと歩き出した鷹矢に慌てて着いていく。
コツコツと足音が廊下に響いた。

細長く薄暗い廊下は終わりが見えない。

「すっごく長いね・・・」

窓もない廊下を5分は歩いている。

息苦しさを感じてジャケットのボタンを外す。

「多分、あと5分ほど歩けば東京駅に出ると思うんだが」

「本当？」

「お前、話きいてなかったのか？この道を歩けばドアが見えてくるらしい。そのドアを開ければ社員用通路にでるわけだ」

「あのドア？」

灰色のコンクリートが続いている廊下にポツンとクリーム色のドアが見えてきて美雪は指をさす。

「あれだな」

鷹矢は頷いて、襟元についている無線のボタンをおした。

「ドアが見えた」

『そのまま入ってください』

アランの声がイヤホンを通して聞こえてくる。

「了解」

短く答えてドアを開けた。

「お疲れ様です」

てつきり無人だと思っていたドアの向こう側に、駅員の制服を着た男が二人立って頭を下げている。

驚いてのけぞった美雪に鷹矢は笑いながら説明した。

「言ってなかったか？俺達の仲間」

「従業員用の通路なんで誰にも見られないようにここから入ってもらいました」

駅員の帽子を取って、明るく言う男は良く見れば結構若い。

「俺達、聖さんにすげー世話になってるんで、どんなことでも協力してるんですよ」

「例の幻の駅は俺達の間では有名な話なんです」

浅黒い肌の男が歩きながら話し出した。

鷹矢と美雪も着いていく。

先ほどの廊下とは違い、幾分明るく感じた。

「運転席にいれば、チラリと見える駅なんですけど、乗客として乗ってたから見えないかもしれないですね。

ちょうど、複雑に別れている分岐店にあるんですよ」

「で、ここがその駅に通じる線路です」

しばらく廊下をあるき、使用禁止とかかかっているドアの前に立ち止まった。

ガチャリとドアを開けるとそこは線路に続いていた。

「線路じゃない」

驚いて真っ暗な線路を見る美雪に駅員は笑った。

「大丈夫ですよ。ここは通常使われている線路ではないので電車に轢かれる事は無いと思います」

「と、思いますって、絶対じゃないってことよね」

「ええ・・まあ。貨物とか時刻表には乗ってないのがたまーに着ます」

苦笑している駅員に美雪は辞めたばかりにドアから一步下がった。

「やっぱり帰る」

「お前はなあ、まだ言ってるのかよ」

すでに線路に降り立っている鷹矢が美雪の洋服を掴んで引いた。
弾みで美雪もドアから線路へと落ちる。

「あ」

危ない。と声を上げそうになった駅員だったが鷹矢が両手で受け止めてそのまま立たせた。

「ほら、行くぞ」

無理やり服を引っ張られて引きずられるようにして歩いていく美雪に駅員は手を振った。

「おきをつけて」

「行きたくない」

「ねえ、電車こないかな」

線路の上ではなく、線路の横にある細いコンクリートの平坦な道を歩きながら美雪は前を歩く鷹矢に声をかけた。振り向きもせずに鷹矢は答える。

「大丈夫だろ」

トンネルのような地下鉄の線路。

明かりはポツン、ポツンとあるほかは真っ暗だ。

鷹矢はジャケットの胸のポケットにライトを入れてその明かりを頼りに歩く。

鷹矢の懷中電灯が照らした明かりだけが頼りだ。

美雪は思い出して、鞆からヘッドライトを取り出して頭につけた。おでこにあるライトのスイッチを押す。

真っ暗だった足元が照らされて良く見えた。

「・・・ダッセえ・・・」

頭にライトをつけた美雪を振り返って、言うがどこがダサイのかわ

からない。

「探検家とかこういうのつけるじゃない」

「頭にライトとか、ありえねえ・・・」

鷹矢が再び歩き始めたので慌てて美雪はついていく。

地下だというのに、風が強く髪の毛を揺らした。

何処から聞こえるのか、風が低いうなり声を上げている。

「ねえ・・・風が人の声みたい聞こえて怖いんだけど」

「そんな音するか？」

首を傾げる、鷹矢に美雪は耳を済ませる。

確かに、ビューューという低い音に混じってウーといううめき声のような音が聞こえる。

「なんか沢山の人の声みたいな・・・」

男とも女とも言えない低いうなり声が風と共に聞こえる。

鷹矢に聞こえないということは霊のこえなのだろうか。

急に怖くなり、鷹矢の上着を掴んだ。

「ねえ、聞こえない？」

「いや・・・聞こえない」

「やっぱり、戻ろうよ。この先なんか怖い・・・」

何かがこれ以上進んではいけないと告げている。

足が重くなり、前に進まなくなった美雪を鷹矢は振り返った。

上着を離して一歩下がった美雪の腕を掴んで無理やり前に歩かせた。

「ダメだ。行かないとマジで何にも解決しないぞ」

「無理、怖いんだもん」

「大丈夫だ」

「なんでそんなに自信があるのよ」

「オレは、ちゃんと修行している。何があっても、大丈夫だ」

そういつて、少しかがんで美雪の瞳を覗き込んだ。

青い瞳がライトに照らされて良く見える。

「コレ持ってる」

美雪の右手にブレスレットをつけた。

「なにコレ」

左手につけられたブレスレットを掲げて見ると、銀で出来た少し細身のチェーンに丸い玉がぶら下がっている。

「お札みたいなもの。オレがデザインしたんだぜ。特注で作っている」

「お札？」

「そう、お守りとか持ち歩くのダセエじゃん。この玉にちゃんと呪が書いてあるから同じ効果」

そういつて、丸い玉を指差した。

良く見ると確かに漢字でなにかかかっている。

「オレのつけているアクセサリーは全部ソレなんだ」

首にも手首にも耳にもついているアクセサリーをまじまじと見ると

確かにどこか変わっている。

首にぶら下がっているネックレスに付いているヘッドは良く見れば梵字のようなものが書かれていた。

「このブレスレットは霊を寄せ付けないように俺が呪をかけておいた。だから大丈夫だ」

「・・・う・・・ん。ありがとう」

左手首を触るとチャラリと音がした。

恐怖が少し薄れた気がして美雪はもう一度腕についているブレスレットを見る。

お札やお守りはたとえ気休めでもどこか心を安心させてくれるようだ。

「ほら、行くぞ」

暗い道を歩き始めた鷹矢に慌てて付いてく。
手探りで鷹矢の手に触れた。

「なんだよ」

「・・・怖いんだって」

そういうと美雪に鷹矢は深いため息をつく。

「いつもそうやってれば、かわいいんだけどなあ」

「はあ？」

「いんや、ほら、行くぞ」

そうやって、美雪の手を握って歩き始めた。

大きな暖かい手の鷹矢に不思議と心が落ち着く。

大丈夫、怖くない。

ジジッと耳にノイズが入り、アランの声が聞こえる。

「大丈夫ですか？」

「おう、今地下鉄の線路の上」

鷹矢が答えると、愛紀の声が聞こえてきた。

「なにモタモタしてんだよ。ちっとも動いてないじゃねえか。GP
S機能が壊れたかと思ったぜ」

「悪い、こいつが怖いってうごかねえんだもん」

鷹矢の言葉に美雪は頬を膨らます。

「だって、変な声が聞こえる気がするんだもん」

美雪の声が聞こえたのか、聖の声が無線を通して話して来た。

「どういう声？」

美雪はマイクのスイッチを押して無線に答える。

「よくわからないんですけど、男と女の低いうめき声みたいな・
でも、風の音かも」

「そう……。200メートル先に駅があるはずだよ」

まだ200メートルも歩くのか。

ウンザリしている美雪に気づいたのか鷹矢はぐいっとないでいた
手を引っ張った。

「大丈夫だって。それとお前の頭に付いているライトまぶしい」

仕方なく美雪は頭からライトを外して鞆につける。

足元を照らすライトのお陰で少しは歩きやすくなった。

鷹矢に引っ張られながら歩く美雪の耳には風の音ともうなり声とも解らない音が聞こえている。

一步一步あるくと、声も少しずつ大きくなっていく。

「……泣き声みたいなの、叫び声みたいなのが聞こえる」

「確かに嫌な感じがするな」

鷹矢も辺りを見回して言った。

『その辺りにドアがあるはずだ』

聖の声が無線を通じて聞こえてきた。

キョロキョロと辺りをみるとコンクリートと同じ色のドアを見つけた。

大きくなく、一人の人間がやっと入れるような小さなドア。

「ありました」

鷹矢が無線に言うのと アランの声が聞こえる。

「気をつけてください。そのドアの向こう側は線路になっていますけど、生きた線路なんで電車ききます」

「マジ？」

不安そうな美雪を引っ張りドアのとってもらしき鉄のノブに手をかけた。

少し重そうなドアを開いて鷹矢はどこから取り出したのか懐中電灯で辺りを照らした。

目の前に線路、左奥に二股に分かれており向こう側の線路の奥に光が見えた。

「えーっと、地図で確認したとおりだったら、この線路越えて向こう側の線路に言っただけの光が幻の駅ってやつか？」

鷹矢が無線に向かって言うと、苦笑気味のアランの声が帰ってきた。

「そうです」

「この線路とか、向こう側の線路とかあの光とか言われてもわからんって」

愛紀も苦笑しているようだ。

「なんか電車の音が聞こえる」

眩いた美雪に鷹矢も耳を澄ます。

風の音に混じってカタンカタンと電車が走る音が確かに聞こえる。

「おい、電車の音が聞こえる」

「ちょっと待ってください・・・ああ、ちょうど列車が通過します。この電車が通り過ぎたらすぐに渡ってください。」

5分後にまた列車通貨予定です」

「ああ？すぐ渡ってたら轢かれてたぞ」

鷹矢は一人文句を言った。

目の前を列車が通り過ぎるのを確認して鷹矢は線路を注意深く渡った。

繋いだままの手を引っ張られて美雪も線路を渡る。
早足に渡り、二股に分かれている線路へと入る。

「……うめき声だ……」

風の音ではなく、人のうめき声が聞こえ美雪は顔をしかめた。

真っ暗なトンネルに明りはポツンと遠くに一つ見える。

「アレが駅の明りか……」

鷹矢は呟いて歩き始めた。

敷き詰められた大きな石ころで歩き難いものの、美雪も引っ張られながら歩く。

「なんか、怖い」

「ここが、幻の駅？」

美雪はホームを見上げながら呟いた。

両手をホームについてよじ登った鷹矢は美雪に手をさしだす。

なんとか引っ張り上げてもらって、ホームへと立った。

不思議なことに、電気は通っているようで、駅名を知らせる大きな看板の電気がついていた。

残念ながら駅名はかかれていない為、自分が立っているホームがどこなのかはわからない。

「まだうなり声は聞こえるのか？」

鷹矢の言葉に美雪は頷いた。

「はっきり聞こえる・・・風なんかじゃないよ」

顔をしかめながらブレスレットを触っている美雪に気づいて励ますように頭に手を置いて撫でた。

「大丈夫だって」

「・・・」

「あっちから声が聞こえる気がする」

指を指しが方角には、エレベーター。

「あっ」

鷹矢は思い出したように声をあげゴソゴソと携帯電話を取り出した。

「なに？」

「サイトにあった写真だよ」

携帯電話のボタンを押して写真を表示させる。

サイトに会ったのと同じ順番だ。

ビル、エレベーターに写真を表示させる。

「このエレベーターと同じじゃないか？」

「そう？」

エレベーターなどどれも同じようなものだ。

同じようにもみえるし、違うようにも見える。

美雪は首をかしげた。

「なんかあるよ」

確信を持って言い鷹矢はエレベーターへと近づいてボタンを押した。静かにドアが開く。

「途中で止まったらどうするのよ？ 閉じ込められるわよ」

すでにエレベーターに乗り込んだ鷹矢に美雪は言った。

「もし閉じ込められたら俺達が向かう」

駅に着いた時点で無線はボタンを押さないでもこちらの声が聞こえるようになっていた。

常にオンの状態だ。

聖の言葉に仕方なく美雪も乗り込んだ。

人のうなり声が大きくなり美雪は思わず耳を塞ぐ。

声は耳から直接聞こえるのではなく頭に響くように聞こえ塞いでも音は小さくならない。

エレベーターのボタンは地下5階から2階まで表示されていた、現在居る場所は地下5階のようだ。

「どうする？とりあえず一つずつ上にあがるか？」

鷹矢は言って、地下4階のボタンを押した。

地下四階でドアが開くと、美雪は耳を塞ぐ。

「すっごいうなり声」

「ビンゴ・・・かな」

明りがついていたホームと違い地下4階は真っ暗だった。

鷹矢の胸のポケットに入れていたライトが辺りを照らす。

誇り臭い廊下は一見普通のビルの廊下のようなのだ。

二人がエレベーターから出ると、確認したかのようにドアが閉じた。

エレベーターの明りがなくなると真っ暗になる。

不安になり鷹矢の上着を後ろから掴んだ。

「真っ暗・・・」

「声はどうだ？」

「聞こえる。この奥から・・・なんか、痛いとか・・・苦しいと

か言っている」

美雪の声を聞いていた愛紀が声を上げた。

「うおおお、すげえええ。オレも行きたかったぜ」

場違いな盛り上がり方に、美雪はムツとして無線に向かって怒鳴る。

「ちょっと、いい加減にしてよ。こっちはすっごく怖いんだから！」

「ゴメンゴメン」

「GPSでは、鷹矢オーナー達は線路上に居るように見えます。ビルなんてないですよ」

「マジで？」

アランと愛紀の声に鷹矢はうなずいた。

「まあ、ありそうなことだよな。森ン中とか道走っててもカーナビ君は道なんて表示してなかったりするもんな」

コツコツと足音を立てて進む鷹矢の上着を離さないように美雪も続く。

「声が大きい・・・」

しばらく歩くと、大きな部屋に出る。

真っ暗な部屋を鷹矢がライトで照らした。

「祭壇がある」

近づいてくと神棚のような祭壇が置かれていた。

1メートルぐらいの高さの木で出来た棚に、鏡とお札が置かれている。

コップには水が入っていたようだが、すでに中身はなくなっていた。祭られている榼も茶色に変形しており鷹矢が触ると粉になって床に落ちていった。

「この奥から声がする」

祭壇が見えないように鷹矢の背中に隠れていた美雪が言った。鷹矢は祭壇をライトで照らす。

「奥にドアがある」

美雪にライトを渡して、鷹矢は祭壇を動かした。

壁にドアがあり、紙のお札がベタベタと張っている。

何かを閉じ込めてあるように貼っている札を見て美雪がますます顔を曇らせた。

ドアを開けばお札は破けてしまうように貼っている。

「何かを閉じ込めましたって感じだな」

鷹矢は注意深くお札を確かめて言った。

「残念だが、このお札効力無いぜ。どこのインチキ霊能力者が貼ったんだが・・・」

「ドア開けてみろよ」

面白そうに言う愛紀の言葉に美雪は首をふった。

「やめようよ・・・怖い・・・」

鷹矢もドアの中に何かを感じて額に出てきた汗をぬぐった。

「確かになんか居るな・・・」

美雪も何かを感じているのだろう。

「苦しいって、痛いって言っている」

「明子ちゃんもこの声が聞こえたのかねえ・・・」

鷹矢は呟いてドアを力強く引っ張った。

ビリビリと音がしてお札が破けていく。

開いたドアから風が吹いて、美雪は目を瞑った。

風が顔に当たり、痛みを感じる。

耳を劈くような、うなり声と悲鳴が聞こえてその場にうずくまった。

「大丈夫か」

鷹矢に無理やり立たせられて美雪はなんとか立ち上がる。

「無理、帰ろうよ」

美雪の言葉を見捨てるように鷹矢は低い声で何かを言った。

お経のような、呪文のような言葉を発し、人差し指と中指を立てて宙に何かを描くと風がやんだ。

「なにをしたの？」

鷹矢が風を止めたような気がして美雪は言う。

「ここは悪霊みたいな悪いのが溜まっているみたいだな・・・」

開かれたドアの中は、土が見えた。

鷹矢がソレを無線で伝えると、聖の声が帰ってくる。

「工事途中で何かの原因で中止したって線が強いかもね」

「駅を作っている途中で何かがあって工事を中止したって感じですかね」

愛紀の声に鷹矢はライトで注意深く照らしながら中に入る。

「心霊現象があったのかもしれませんがね」

「ここで沢山の人が死んでいるんじゃないの？」

美雪は鷹矢にしがみ付きながら言った。

「どうしてそう思うんだ？」

鷹矢の問いかけに美雪は嫌そうに答える。

「痛いって、苦しいって声が沢山聞こえる・・・それに凄く嫌な感じがするの」

「なるほど、声はオレには聞こえないけど沢山の霊の気配はするな・・・」

鷹矢がそういったと同時にライトの明りが消え辺りが真っ暗になった。

「ちょっと！なに電気けしているの」

パニックになりかけている美雪を落ち着かせるように鷹矢は彼女の肩を抱いた。

「勝手に消えた。動くなよ」

ますます大きくなるうめき声に美雪は耳を塞ぐ。
右足を何かに引っ張られて体制を崩した。

「きゃ・・・」

慌てて支える鷹矢も何かに足をとられる。

「チッ」

舌打ちして、右手をあげて人差し指を中指を立てて口の中で短く唱え、鷹矢の足を掴んでいたものは消えた。

「美雪！」

暗闇で見失った美雪の名を呼ぶと悲鳴がかえってきた。

「助けて！」

声を頼りに手を伸ばすが、彼女の体を掴むことは出来なかった。

「何かに引っ張られる！」

背中も頭も体全体を引っ張られる何かを手で掴むと、人の手だということが解りまた悲鳴を上げた。

耳につけてる無線はノイズしか聞こえない。

暗闇に目が慣れたのか、美雪の体を掴んでる手が壁から出ているのが見えた。

必死にもがくが、腕からは逃れることが出来ない。

「助けて！」

必死に手を伸ばす美雪の手を鷹矢は掴んで紙で出来たお札を壁に貼り付けた。

静電気のような青い光が一瞬お札の周りを一周するとピツタリと張り付いた。

同時に壁から出ていた無数の手が消えて美雪は慌てて鷹矢に駆け寄る。

「こ、怖かった」

「一時的に封印しただけだ、すぐに復活するかもしれない」

「はああああ？」

「しょうがねえだろ。なんなんだ、アレは・・・」

うめくように言って、鷹矢は奥へと歩き始めた。

「・・・か・・・大丈夫か？」

いつの間にか復活したのか、無線のイヤホンから聖の声が聞こえてきた。

「は、はい・・・」

美雪が答えると、安心したかのような聖と愛紀の声が聞こえる。

「怪我は？」

「大丈夫です」

「ノイズしか聞こえなくなったからあせったぜ」

チカチカとライトが瞬いたあと、辺りが明るくなる。

「懷中電灯がついた」

鷹矢は懷中電灯で穴の奥を照らして呟いた。

「・・・また祭壇?？」

奥に木で出来た棒が立て垂れており、その前にまた祭壇らしきものが置いてある。

嫌がる美雪を引っ張って鷹矢は懷中電灯で慰霊碑らしき棒に書いてある文字を読んだ。

「昭和20年 3月10日 安らかにお眠りくださいって書いてある・・・」

鷹矢が呟くと、聖が少しして言った。

「・・・その年月って東京大空襲じゃないか?」

「えっ?」

美雪が驚いて声をあげるとアランの声が聞こえた。

「あ、そうですね。今ネットで調べたら、日にちあってますよ。よくわかりましたね聖さん」

「まあね」

「これは慰霊碑?」

美雪が言うと鷹矢は不思議そうに祭壇を眺めた。

「おかしくねえか?こんな地下に慰霊碑って・・・、地下鉄の工事で死んだ人を祭るならわかるけど・・・」

言いながら慰霊碑に近づく。

美雪の耳には、うめき声が聞こえ逃れるように首を振った。
痛い、苦しい、熱い。

悲鳴にも似た声は、空襲で死んだ人の声なのだろうか。
そう思うとますます怖くなり耳を塞ぐ。

「まだ声聞こえるか？」

「……あ……なんか……」

美雪はどこかで聞いたような声に顔を上げた。
うめき声に混じってサイトを見たときに聞いた声が聞こえる。

「あのサイトの声だ」

「……明子ちゃんかな？」

鷹矢が言うともまたライトが瞬いた。

「やだ……」

不安そうに辺りを見回している美雪に、鷹矢も辺りを見回す。
電気が消えると同時に美雪の腕を何かが掴んで引っ張られた。

「いやあああ」

悲鳴を上げながら祭壇に倒れこんだ美雪はそのまま手に引きずり込まれる。

「やだ」

悲鳴を上げてバタバタと床に倒れてもがいている美雪に鷹矢は手を

伸ばした。

「早く、霊をなんとかして」

「・・・いや、それ霊の手じゃねえだろ」

霊と人間の区別ぐらいつく鷹矢は言う。美雪は大きな居悲鳴を上げた。

人間の手が壁から出てくる。

常識外のことにパニックを起こして大きな声をあげる。

「たすけて・・・ください」

かすかな声に、美雪は悲鳴をこらえて壁から伸びる手を掴んだ。ひんやりとした手は確かに人間のものだ。細い指に細い手首。

「おい、美雪」

鷹矢は慌ててかけよって美雪の足を掴んでいる手を引っ張り出した。土の中に半分埋もれるようにしていた女性は鷹矢に引きずられて出される。

「生きているの？人間なの？」

半分泣き顔の美雪の言葉に鷹矢は落ち着けと手を掴んだ

「生きている人間だ」

鷹矢が言うと、女はゴホゴホと咳をして苦しそうにその場に倒れたまま起き上がらない。

「大丈夫か？・・・もしかして、明子ちゃん？」

鷹矢の言葉に無線から驚きの声が聞こえた。

「おいおい、明子ちゃんってあの行方不明だっというA子ちゃんだろ？」

「いや、制服きているし。この髪型といい。明子ちゃんだろ？」

鷹矢が問いかけると、女は弱弱しく頷いた。

「え？本当に明子ちゃん？」

アランが驚いたような声を出す。

「行方不明になったのは一ヶ月前ですよ。生きていますか？」

「生きているようにみえるけど・・・」

かすれた声を出す美雪に鷹矢は手に持っていた懐中電灯を渡した。

「オレが思うに、ココで死んだ霊たちはちゃんと供養されていないから自分達が居ることをアピールしたくて呪いのサイトとかつくったんじゃないの？」

「そんなバカな」

かすれた声を出す美雪に鷹矢は肩をすくめる。

「ま、こいつらも必死だからなあ」

鷹矢の言葉に、明子が弱弱しく声をだす。

「つかまっちゃったんです・・・ここの霊に・・・気づいたらココに居ました」

「よし、ちょっと行ってくる」

「行くなってどこに？」

立ち上がった鷹矢の手にはお札が握られていた。

「ちゃんと供養してやるからって説得するんだよ。お前も協力するよな」

「はあ？ どうやって？」

「お前は霊と話せる、説得するんだよ」

「はあ？」

当たり前のように言う鷹矢に美雪はポカンと口をあけた。

「いいか、ちゃんと供養しますからのろわないでください！ っていえ」

「はあ？」

無理やり鷹矢に立たされて、背中をドンと押される。

慰霊碑の前にたって、美雪は不安になり鷹矢を振り返った。

「……」

出来るかどうか不安だったが、鷹矢が言うならやるしかない。

美雪は意を決して慰霊碑の前で両手を合わせて祈るように頭を下げる。

気づけば、うめき声も風の音も聞こえない。

静寂だった。

「静かになった・・・」

美雪が顔を上げると、鷹矢は満足そうに頷いてお札を慰霊碑に貼り付けた。

不思議なことに鷹矢がお札をはると、青い光がお札を囲む。

「どうして青い光がでるの？」

美雪の言葉に鷹矢は驚いたように目を見開いた。

「お？見えるのか？青い光」

コクリと頷く美雪に、無線からアランの声が聞こえた。

「それは凄いですね。普通見えないらしいですよ。僕も見えませんから」

「そうなの？」

美雪も驚いて鷹矢をみると、苦笑しながら手を伸ばして美雪の頭を力強く撫でる。

「お前才能あるよ」

「うれしくないんだけど」

嫌そうにして言う美雪に笑って、鷹矢は明子の傍に座った。

「立てる？」

左右に首を振る明子の顔は衰弱しきっている。
目を開けているのもやっとのようだ。

「多分、しばらくはコレで大丈夫だろ」

美雪に懷中電灯を持たせて、鷹矢は明子を背負う。

それを手伝いながら美雪は不安そに慰霊碑をふりかえった。

「私達も死なないってこと？」

「今はお札でおさえているし、美雪がお願いしたから大丈夫だろ」

「そんなことよく言えるわね」

「オレの、長年のカン」

美雪はため息をついた。

「鷹矢がそういうなら安全だろう」

聖が無線を通じて言ってきた。

「なら、いいんですけど・・・」

明子を背負って歩き出した鷹矢に続いて美雪も歩く。

洞窟のような穴から部屋へと戻ったところで鷹矢が穴を振り返った。

「ちゃんとした、人に頼んで供養してもらおう。何年もかけて供養しないとだめだろうな」

「本当に大変だったわね」

美雪は週刊誌を机において、お茶を出してくれたアランを見上げる。ホストクラブ聖の事務所にはアランと美雪の二人だけだ。ホスト達はまだ出勤しておらず、鷹矢の姿も無い。

ソファアーに座って出されたお茶を飲んでみると、机に置かれた雑誌をアランがパラパラとめくった。

「事件になってますね」

「そりゃーそうよ。行方不明の女の子が一ヶ月ぶりに出てきたんだから」

「でも、詳細は不明ってなってますね」

週刊誌には、呪いのサイトやら、存在しない駅などかかれては居なかった。

不明の女子無事保護。どこにいたのか？
それだけしか書かれていない。

地上に戻ってから、鷹矢は明子のために救急車を呼んだ。
病院へと搬送される明子を見送っていると、当然の事ながら警察もやってくる。

鷹矢と美雪は警察に事情聴取をされた。

美雪は警察署に入るのも初めてだし、事情聴取なども初めてだ。まるで犯罪者になった気分だった、正直に霊の声が聞こえたと話したがふざけるなと怒られている最中になぜか開放された。

上の命令だから今回は、詳しいことは聞かないと納得のいかないような刑事に送り出されて警察から出ると

鷹矢がニヤニヤと笑って立っていた。

美雪は首をかしげていると鷹矢は一言。

「ま、ちょっと上に掛け合ってもらった。これ以上のお咎めは無い」「あんた、警察関係にも顔がきくの？もしかして聖さん？」

あっけにとられて言う美雪に鷹矢は肩をすくめた。

「いや、聖さんじゃないな。今回は、オレのツテ」「ふーん」

これ以上突っ込んでも頭がおかしくなるだけだ。

美雪は頷いてあくびを一つ。

気づけば日が昇っていた。

「鷹矢さんってどういう人なの？警察に顔が利くなんて・・・」

雑誌を見ているアランに言うのと困ったように首を傾げる。

「それは僕の口からは・・・。直接鷹矢さんに聞いてください」

ため息をついていると、ガチャリと事務所のドアが開いてウワサの鷹矢が入ってきた。

「お、もう来てたのか」

事件から10日が過ぎている。

10日ぶりに会う鷹矢の姿は、赤いワイシャツに黒いスーツ。事務所に来いという一方的なメールで仕方なくやってきたのだ。

「お互い生きててよかったな」

歯を見せて笑う鷹矢に美雪も苦笑する。

「そうね」

美雪の向かいにあるソファアにドカッカリとすわって、トレードマ
ークのサングラスを外した。

青い瞳を美雪に向ける。

「とりあえず、定期的にあの慰霊碑を供養してくれるように頼ん
できた」

「そう」

誰にどう頼んだのかは解らないが、それであの霊たちが供養される
ならいいことだ。

「明子ちゃんも明日退院ですって」

美雪が言うと鷹矢はそうかとうなずいた。

「でだ、お前ココで働け」

鷹矢の言葉に美雪は飲んでいたお茶を噴出した。

「な、なんで？」

「パソコン使えんだろ？事務員として採用決定。聖さんもオツケーだしたぜ」

「いやよ、ホストクラブで事務なんて・・・」

顔をしかめる美雪に鷹矢はニッコリと笑った。

「裏の仕事も手伝ってもらうからな」

「なんで・・・」

講義しようとする美雪に鷹矢は今まで見せたことが無い笑みを浮かべる。

「今度、霊と遭遇してもたすけてあげないよ」

「・・・」

ソレは困る。

美雪はため息をついて渋々頷いた。

こうして美雪はホストクラブ聖の事務員として働くことになったのだ。

「よかったですね。高原オーナー。裏の仕事の助手さがしてましたものね」

天使の微笑みを浮かべて言うアランに美雪は声をあげる。

「裏の仕事ってなによお、あたし、助手なんて嫌よ」

「お前には、いろいろ教えてやるからな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2210j/>

靈感ホスト

2010年10月23日07時39分発行